

ただし、A・B・Cの木杭群すべてが一体の構造体であったのか、あるいは別個の構造のものであって、しかも時期が異なっているものか、という点については、木杭群の残存状況が必ずしも良好ではないために、詳細については、今回の調査成果だけでは判明しない。

なお、SX14の西に分布するCグループは、層位からみて、さらにその西側を平行して南流する河川13と併存し得ない関係にあることは判明しているので、上記のA・B・Cの木杭群すべてが、仮に同一の時期もしくは構造と想定するのであれば、SX14は河川13が埋没した後の時期に構築された遺構として考えられよう。

あるいは、SX14の西に分布するCグループのみ

が別の構造体であり、そして時期が異なると想定するのであれば、残りの2つのグループは河川13とは何らかの関連性がある護岸・治水施設として想定することも可能である。

今回検出した河川13およびそれに関連する可能性があるSX14については、調査地周辺の平城京が廃絶した平安時代初期以降の時期の治水の様相を考察する上では、重要な見知ともなろう。

遺物は、遺物整理箱約4箱分が出土した。土器については、奈良時代のものは比較的少なく、平安時代前期頃のものが多くを占める傾向にある。このほか、古代の丸・平瓦片や中世の瓦器片、近世の陶磁器片、植物の種子なども出土している。

（武田和哉）



第470次調査 発掘区全景（北西から）



第470次調査 発掘区全景（東から）



第470次調査 発掘区中央部（北から）



第470次調査 護岸施設SX14（東から）

## 4. 油坂遺跡・平城京跡（左京三条四坊十三坪・東四坊大路）の調査

第461・465・479次

遺跡名	調査次数	届出者名	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
油坂遺跡・平城京跡 東四坊大路	HJ461	奈良市長	芝辻大森線 街路整備事業	大宮町2丁目 82-59, ほか	H13. 5.28 ~ 8.23	714a <sup>2</sup>	久保邦江
平城京跡 左京三条四坊十三坪	HJ465	奈良市長	大宮幼稚園 園舎建設事業	大宮町2丁目 1-16	H13. 8.20 ~ 10. 9	368a <sup>2</sup>	松浦五輪美
油坂遺跡・平城京跡 東四坊大路	HJ479	奈良市長	芝辻大森線 街路整備事業	大宮町2丁目 82-1, -7, -63	H14. 6. 3 ~ 7.19	394a <sup>2</sup>	久保清子

## I. はじめに

平成13年度から14年度にかけて大宮町2丁目ににおいて近接した3件の発掘調査を行った。当該地はJR奈良駅から北西約200mの位置にあり、現状は住宅地の一角である。平成13年度には、HJ第461次調査を芝辻大森線街路整備事業に伴って、HJ第465次調査を大宮幼稚園園舎建設事業に伴って行った。平成14年度は、HJ第479次調査を第461次調査の北側で、同じく街路整備事業に伴い調査した。第479次調査は第461次調査と一連の調査であるため、今回まとめて報告する。

第465次調査地は、平城京の条坊復元では、左京三条四坊十三坪の北東部にあたり、その東側に面している東四坊大路の想定される位置に第461・479次調査地がある。

これらの調査地の周辺では、位置図に示してあるとおり、比較的調査例が多く、縄文時代後期から奈良時代までの各時代の遺構を検出している。奈良時代より古い時代の遺構は少ないが、古い時代の遺物が出土する頻度は比較的高い。

今回の調査地は、県の遺跡地図<sup>1)</sup>で地図5-D対照番号76（弥生時代遺物散布地）に隣接しており、後述する出土遺物からみて、これと一連の遺跡と考えることができる<sup>2)</sup>。しかし、奈良時代以前で確実な遺構は、本調査地から北東約100mの位置で検出した住居跡1棟・貯蔵穴のみで（県、1995年調査）、他には河川跡を確認したにすぎない。ただし、河川跡から出土した土器を見る限りでは、周辺に集落がある可能性が高いと考えられる。調査地周辺は都市化が進み、旧地形もわからない状況で、遺跡の範囲をにわかに決めがたいが、奈良



第461・465・479次調査 発掘区位置図 1/6,000

時代以前については平城京とは区別して、市HJ第422次調査（平成10年度）で付した「油坂遺跡」という名称を便宜的に使用したい。

調査を行うにあたっては、第461・479次調査では東四坊大路面・側溝の確認、第465次調査では十三坪の宅地内の様相を知ることを主目的とし、併せて前述の油坂遺跡の様相を明らかにすることを目指した。弥生時代後期末から奈良時代の遺構は同一の面で確認し、その後一部（遺構平面図綱目部）を掘り下げ、整地土層より下の弥生時代、縄文時代の遺構を検出した（以下、下層遺構と表記）。

## II. 基本的な層序と地形

第461次調査発掘区では、上から、造成盛土0.6~0.9m、耕土の灰褐色砂質シルト0.1~0.15m、茶褐色土0.1mと続き、北東隅では、標高64.2mで橙褐色シルトの無遺物層に至る。

その北の第479次調査発掘区は、第461次発掘区との間に谷を挟んでおり、耕土以下の土層の堆積

1)『奈良県遺跡地図 第1分冊』奈良県教育委員会 1998。

2) 対照番号76の範囲は、市54次調査の発掘結果から記載されたものと

思われるが、記載された範囲は、54次調査地の位置より少し東にずれている。

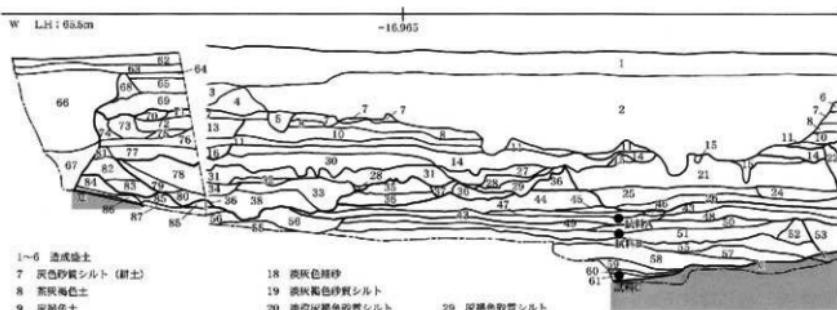


第461次調査

上一発掘区北半部（北から）、下一発掘区南半部（南から）

第479次調査

上一発掘区南半部（北から）、下一発掘区北半部（南から）



- 1~6 造成土
- 7 黄褐色砂質シルト（耕土）
- 8 茶褐色土
- 9 河原色土
- 10 淡灰褐色砂質シルト
- 11 黄褐色砂質シルト
- 12 灰褐色土
- 13 淡灰砂質シルト・黄褐色土ブロック組じり
- 14 淡灰砂
- 15 淡灰砂
- 16 灰褐色砂
- 17 灰色土塊砂質シルト
- 18 灰色シルト

- 19 淡灰褐色砂質シルト
- 20 淡灰褐色砂質シルト
- 21 淡灰褐色砂質シルト
- 22 灰色シルト・淡褐色シルト
- 23 灰色粘土・砂混じり
- 24 灰色シルト
- 25 灰色シルト
- 26 灰色シルト
- 27 灰色砂質シルト
- 28 灰色砂
- 29 淡褐色砂質シルト
- 30 淡褐色砂
- 31 淡褐色砂質シルト
- 32 淡褐色砂質シルト
- 33 灰色シルト・淡灰褐色砂混じり
- 34 淡褐色砂質シルト
- 35 灰色シルト
- 36 灰色シルト
- 37 淡褐色砂質シルト
- 38 灰色シルト（青灰色シルトブロック含む）
- 39 灰色シルト
- 40 黄灰褐色シルト
- 41 淡灰色シルト・黄褐色シルト
- 42 灰色・青灰色・黄褐色シルト（無機物・鉱物六？）
- 43 青灰色シルト（鐵絶土層出た）

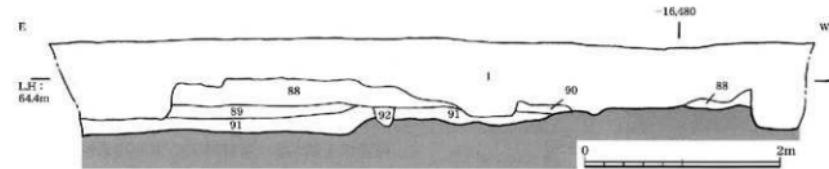
第461次調査 発掘区北壁土層図（西、西端部はX=-146,450ラインの拡張部北壁） 1/50

が異なる。耕土以下は、灰色もしくは灰茶色砂質土が0.1~0.15m、黄灰色粘土が0.1~0.3m、黄褐色粘土が0.3~0.5m、黄灰色粘土が0.3~0.5mと続き、青灰色シルトの無遺物層に達する。

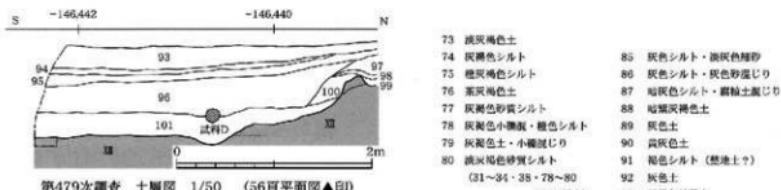
第479次発掘区の南端から第461次発掘区の北半にかけての浅い谷があり、その埋土は、第479次発掘区では底から灰色粗砂と灰色粘土の混合土（土層101）、流木を含む灰色粘土（土層96）、暗灰色粘土（土層95）、灰色シルト（土層94）、灰褐色

粘質土（土層93）の順に堆積している。第461次発掘区では、谷埋土最下層に茶褐色シルトの腐植土（土層59・61）、灰色粗砂（土層60）、灰色粗砂・中粒砂（土層58）、青灰色シルト（土層51）が細かい単位で堆積していることから、谷底に河川があった可能性が高い（河川01）。河川01は、その後、青灰色シルト、灰色シルト、濁青灰色シルト（土層49・50）の堆積によって埋まる。

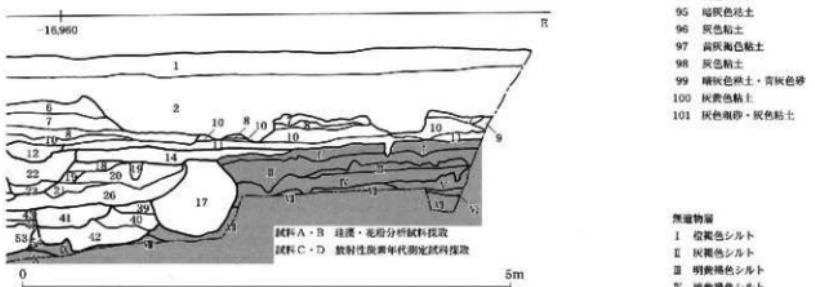
また、いずれの発掘区でも流木が埋まっており、



第465次調査 発掘区南壁（東半）土層図 1/50



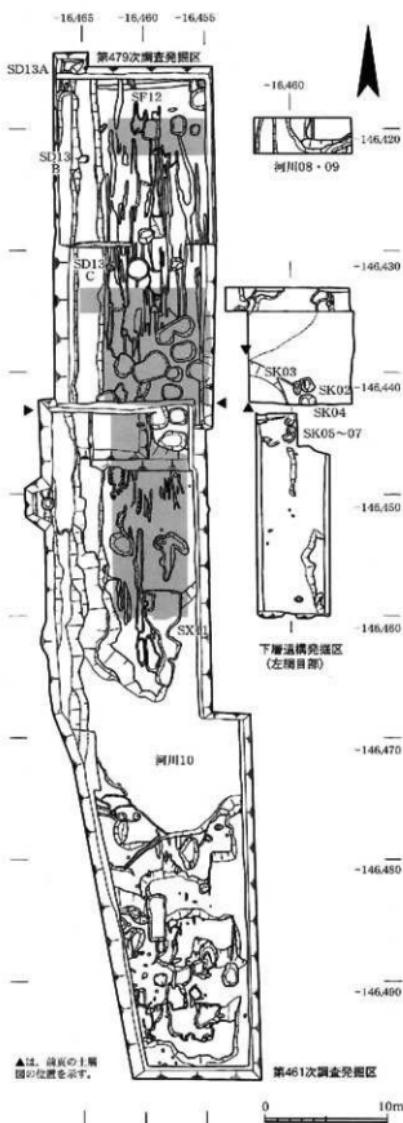
第479次調査 土層図 1/50 (56頁平面図▲印)

試料A・B：柱状・花粉分析試料採取  
試料C・D：放射性炭素年代測定試料採取

無機物質	
I	棕褐色シルト
II	褐褐色シルト
III	明黃褐色シルト
IV	淡黃褐色シルト
V	灰褐色シルト
VI	灰色・青灰色シルト
VII	明黃褐色シルト
VIII	青褐色シルト
IX	明黃褐色シルト
X	青褐色・灰色シルト
XI	青褐色シルト
XII	青褐色色鉛
XIII	青褐色シルト

44	淡灰色シルト	52	青灰色シルト	59	茶褐色シルト（腐植土）	81	明黃褐色シルト	
45	青灰色・灰色シルト	53	灰色・青灰色・黃褐色シルト	60	灰色粗砂	82	青褐色シルト	
46	青褐色シルト	トブロック泥じり（SK05埋土）	61	茶褐色シルト（腐植土）	62	茶褐色シルト・灰色シルト	83	青褐色シルト
47	淡灰褐色・灰色シルト	64	青灰色・灰色シルト	(55~61 河川01層上)	65~69	淡灰褐色・灰色シルト	84	灰色シルト・青褐色泥じり
48	淡灰褐色シルト	65	青灰色シルト・細砂	70~76	淡灰褐色・灰色シルト	85	灰色シルト・淡灰褐色細砂	
49	淡灰褐色シルト	66	青褐色シルト	77	淡灰褐色砂質シルト	86	灰色シルト・灰色砂質じり	
50	青褐色・灰色シルト	67	灰色粗砂・小礫	78	淡灰褐色シルト	87	暗灰色シルト・褐色土混じり	
51	青褐色シルト	58	灰色粗砂・中粒砂	79	淡灰褐色シルト		青褐色シルト	

第461次調査 発掘区北壁土層図（東） 1/50 (56頁平面図▲印)



第461・479次調査 遺構平面図 1/400

これらの放射性炭素年代測定を行ったところ。第479次調査の灰色粘土（土層96）は $2,530 \pm 60$ 年B.P.（繩紋時代晚期後半）、第461次調査の茶褐色シルト（土層61）は $2,340 \pm 60$ 年B.P.（繩紋時代晚期末～弥生時代初頭）という値を得た（140頁参照）。これらの結果と、河川01が埋没した後の堆積土の暗灰色シルト（土層43）から繩紋土器が出土していることから、谷の埋没は繩紋時代晚期以降であることが判明した。

なお、第465次発掘区の基本的な層序は、東隣の第461次発掘区と同様である。

### III. 検出遺構

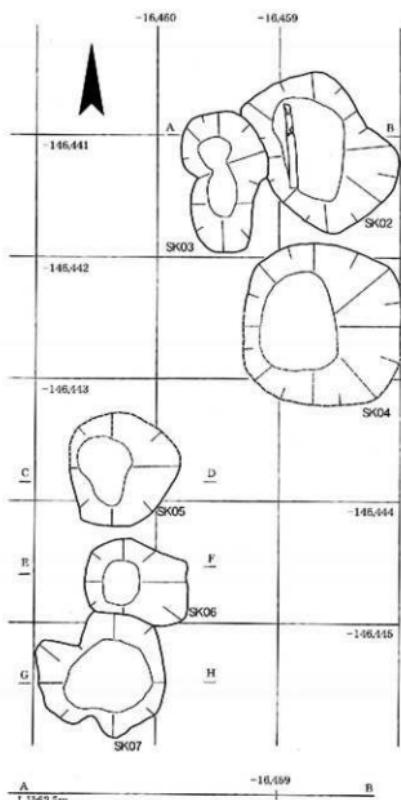
検出した遺構には、繩紋時代晚期の土坑6基、弥生時代から古墳時代初頭の河川3条、古墳時代初頭の土坑1基、奈良時代の東四坊大路・同西側溝・掘立柱建物6棟・掘立柱塀2条・井戸1基・土坑群、中世の粘土採掘坑22基、時期不明の水田跡がある。

各時期の遺構の存する面は、繩紋時代以前の下層遺構は、青灰色シルト [461・479次]、灰色シルト [461次]（土層52・54）上面で、その標高は63.3～63.4mである。弥生時代から古墳時代の遺構は橙褐色砂質シルト [461次]・黄褐色粘土 [479次] 上面、奈良時代の遺構は整地土層の灰色シルト [461次]（土層35・36）・灰黄色砂・茶褐色砂質土、黄褐色粘土 [479次]、橙褐色シルト、黄色粘土、灰色砂砾 [465次] の各上面である。弥生時代から奈良時代の遺構の存する面の標高は、概ね64.0m前後である。

#### A. 繩紋・弥生・古墳時代の遺構

**SK02～07 [461・479次]** 下層遺構面で検出した。いずれも平面不整円形、掘形の底面がボウル状の土坑である。

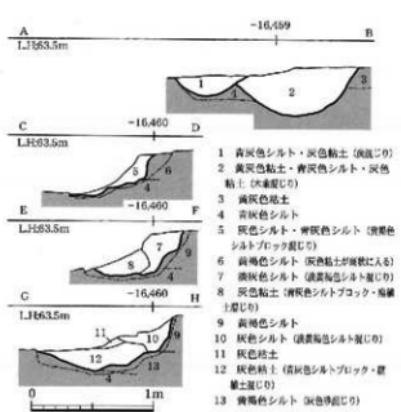
SK02は、平面が径1.0～1.3m、深さ0.4mである。坑内からは径6cm、長さ70cmの木杭が1本、南北方向に横たわった状態で出土した。SK03は、平面が径0.6～1.1m、深さ0.2mである。重複関係からSK02はSK03より古いことがわかる。SK04は、平面が径0.8～1.3m、深さ0.42mで北半のみ検出した。SK05は、平面が径0.9m以上、深さ0.3mで南半を検出した。SK06は、平面が径0.6



上坑SK02・03・04 (北から)



土坑SK05・06・07 (西から)



土坑SK02-07 平面及び断面・土壌図 1/40



第461次調査 下層遺構発掘区 全景 (北から)

～0.85m、深さ0.35m。SK07は、平面が1.0～1.3m、深さ0.4mである。重複関係からSK07はSK06より古いことがわかる。

これらの土坑が掘削されたのは、先述の河川01が埋没してから繩紋土器（晩期？）の出土した暗灰色シルト（土層43）が堆積するまでの間である。従って土坑の掘削された時期は繩紋時代晩期であると考えられる。

また、SK04～07の埋土から堅果が少量出土している。SK05～07のものについては、種実の同定の結果、クリ、ヤツツバキが各1点ある以外はすべてアカガシであった（138・139頁参照）。SK04から出土した堅果については同定をしていないが、他のものと肉眼で比較した結果、アカガシであると思われる。

また、これらの土坑が埋没した後の堆積土（土層51）は、珪藻分析の結果、流水の影響を受ける止水域のものであることが判明した（134～137頁参照）。したがって、水の調達が容易な位置に土坑が掘削されているといえる。谷地形に沿って掘削されているという立地的条件を考慮すると、これらの土坑はいわゆる低湿地型の貯蔵穴であると考えられる。

同時に同じ試料で花粉分析も行い（129～133頁参照）、当時の環境がシイ・カシを主とする照葉樹林であったことが判明した。これはSK05～07で出土した堅果の種実同定の結果と一致する。繩紋土器が出土した層（土層43）でも同様の分析を行なったが、珪藻分析の結果、流水があるものの、沼沢から湿地状であり、谷が埋没する過程で、次第に流水の範囲が減少していることが判明した。

**河川08・09 [479次]** 河川08は、発掘区の北東から南北方向の流路である。全体の形状は不明瞭だが、整地土層の下で一部を確認した。同じ位置で、幅と時期の異なるA（旧）・B（新）の流路がある。

河川08Aは、幅5.0～12.0m、深さは奈良時代の整地上層の下から0.5～1.0mである。埋土は基本的には、青灰色シルトと灰色粘土、黄灰色粘土の混合土、青黄灰色粘土もしくは黄灰褐色粘土、青灰色粘土の順に堆積している。埋土から弥生時代

中期・後期の上器が数点出土した。

河川08Bは、幅2.0～6.0m、深さ0.5～0.7mで、埋土は基本的に灰色砂、灰色シルト、暗灰色粘土の順に堆積し、いずれも流木を多く含む。埋土から弥生時代後期から古墳時代初頭ごろの土器が遺物整理箱の半分量出土した。なお、流路Bには、東から河川09が流れこんでいる。

**河川10 [461次]** 発掘区中央部で検出したU字形に大きく蛇行する河川である。幅は屈曲する部分で約12m、深さ0.9m以上。埋土は主に灰色・褐色砂礫であるが、蛇行する部分の上層にはシルト質の土が堆積している。弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての上器、部材とみられる木製品、用途不明の板状の鉄製品が出土した。

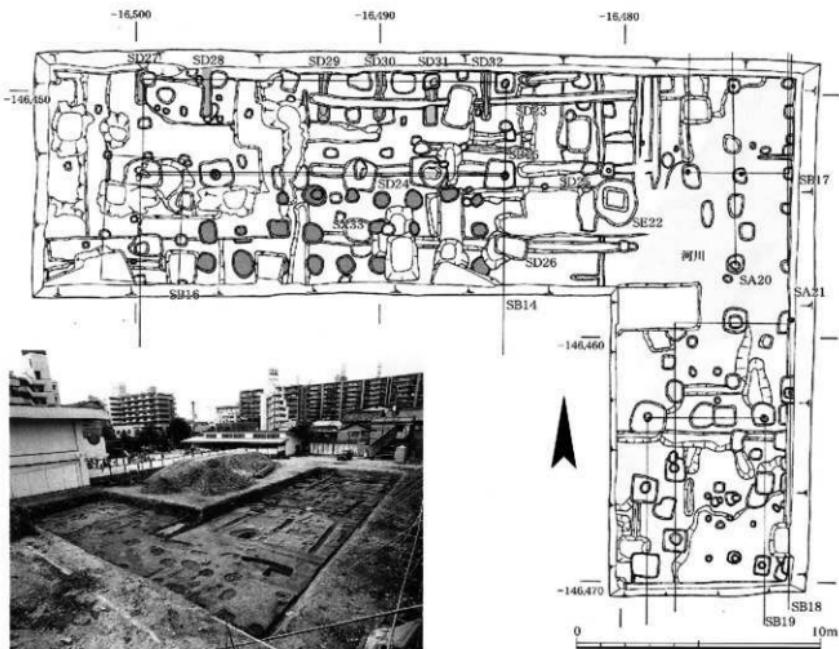
**SX11 [461次]** 発掘区中央や北寄りの部分で検出した性格不明の遺構。平面不整形で長辺5.4m、短辺2.9m。底面は凹凸があり、深さは0.05m程度である。埋土から古墳時代初頭の上器が出土し、遺構の北端と中央部分の2箇所で炭化物が集中しているのが認められた。

#### B. 奈良時代の遺構

##### 東四坊大路SF12・西側溝SD13 [461・479次]

路面幅は12mまでを確認している。東四坊大路の幅員を16.05mとする成果がある（市HJ第377-1次調査・平成9年度）ため、東側溝は発掘区外になると考える。河川08・09と重複する部分の路面には、整地が行われている。整地土には奈良時代の土器、瓦礫が含まれているが、その大半が須恵器の壺や鉢の破片が占めている。出土遺物の時期から、大路造営時の整地というよりは、人路完成以降の路面の整備に伴うものであった可能性が高い。西側溝は3度以上の改修がある。重複関係から、掘削した順にA、B、Cとする。

SD13Aは、周辺の調査成果から想定される大路と三条条間南小路との交差点地点で検出した。幅0.7m以上、長さ2.5m以上、深さ0.4mで西岸は発掘区外に位置する。溝の南側は後にSD13Bが掘削されているため、全長は不明である。最深部の回土座標値は、X=-146,415.70m、Y=-16,467.26mである。この数値は、市第377-1次調査で検出した西側溝（X=-146,827.50m、



第465次調査 発掘区全景（北東から）、同調査 発掘区遺構平面図 1/200

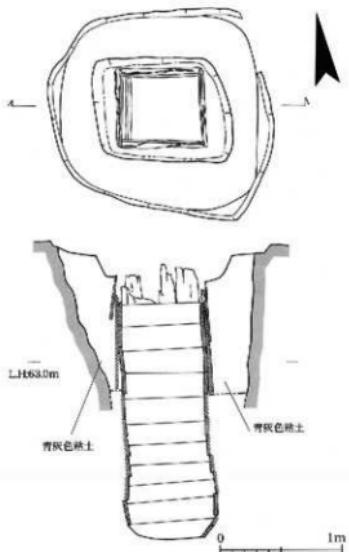
$Y = -16,465.50m$ ）に朱雀大路の國方眼方位に対する振れ（ $N - 0^\circ 15' 41'' W$ ）を考慮して換算した数値（ $X = -146,415.700m$ ,  $Y = -16,467.379m$ ）に近似している。埋土から奈良時代の土器が若干出土した。

SD13Bは、幅3.0m以上、深さ0.5mで、西岸は発掘区外に位置する。北端は、周辺調査で検出している三条条間南小路南側溝の延長上にあたる、 $X = -146,417m$ 付近で途切れ、それより北へは続かない。したがって、小路南側溝に接続し西に曲がっていた可能性が高い。埋土から弥生時代後期初頭頃の土器、奈良時代の土器、瓦、土馬、輪羽口、曲物底板、モモ核が出土した。

SD13Cの幅は、小路との交差点に想定される地点では2.0mであるが、それ以降では、4m以上と広がり、西岸は発掘区外に位置する。深さ0.3m～0.5mである。交差点地点の溝心は、 $X = -$

$146,417.00m$ ,  $Y = -16,465.98m$ である。埋土から奈良時代～平安時代初頭の土器、奈良三彩、綠釉陶器、瓦、土馬、輪羽口が出土した。

**掘立柱建物SB14～SB19 [465次]** SB14は、桁行5間（15m）、梁間2間（6m）以上の東西棟と推定される大型建物で、1.2m四方の柱掘形を持つ。柱掘形の底には數枚の板が重ねて敷かれ、柱の沈下を防ぐ工夫がなされていた。SB15は、桁行5間（15m）、梁間2間（3.6m）の東西棟で、SB14の北に主軸をそろえて重なっている。柱掘形内には磚が据えられており、SB14の柱掘形に重なる南側柱列では、磚の代わりに礎や切り残したSB14の柱をそのまま利用した箇所もある。SB16は、桁行3間（4.8m）、梁間2間（3m）の南北棟で、主軸が北でやや東に振れる。SB17は、桁行2間（4.8m）以上、梁間2間（4.2m）と推定される南北棟、SB18は、桁行4間（12m）以上、梁間2間（4.8m）



井戸SE22平面、及び立・断面土層図 1/40

の南北棟、SB19は、桁行3間（9m）以上、梁間2間（4.8m）の南北棟で、ともに約1m四方の柱掘形をもつ建物である。SB18は、SB14の東端から7m離れており、北側柱列はSB14南側柱列の推定位置と直線上に並ぶ。SB19は、同じく6m離れており、北側柱筋は南に3.6m下がっている。SB18とSB19の前後関係は不明であるが、少なくとも一方はSB14と一緒に建っていたと考える。

**掘立柱塀SA20・21 [465次]** それぞれ南北3間（7.6m）以上で、約2mの間隔で並行しているが、併存か建て替えかは不明である。

**井戸SE22 [465次]** 直径約1.8mの平面円形の掘形に、東西0.65m、南北0.5mのやや長方形の井籠組の枠をもつ井戸である。深さ約2.2m、横板10段分が残存していた。深さ1mまでは、井籠組枠の外側に縦板があてがわれていた。構造的にはこの板がなくとも枠は十分保たれると考えられるため、これは、上部の砂礫層からの湧水が入り込むのを防ぐ装置であるとも考えられる。この井戸は、組み上げながらその都度、横板の仕口の切



井戸SE22 上：枠内部（南から）、下：枠側面（南から）

り込み調整していたようであり、板ごとに仕口状態が少しずつ異なっている。外側の縦板には井籠組の横板も転用されていた。しかし、それらは結局うまく合わず不要となったものが用いられたものと思われる。奈良時代後半の遺物が出土した。

**溝SD23～26 [465次]** 長さ13～14m、幅約0.4m、深さ0.15m前後の東西溝。溝の断面形は箱形に近く、壁面がほぼ垂直に立ち上がっている。東端は次第に浅くなっていくが、西端は急激に立ち上がって終わる。SD24と25は直接繋がっていないが、同一の溝もしくは同様の機能をもつものと思われ、都合3条の東西溝が約3m間隔で並行している状態である。これらの溝の時期は、SB14よりも古いが、奈良時代に属するという以上は不明である。溝列はさらに発掘区外北へ並んでいる可能性もある。東端が東四坊大路の側溝まで延びていたとすれば排水溝の可能性もあるが、詳細な機能は不明である。

**溝SD27～32（網目部）[465次]** 幅0.2～0.5m、深さ0.1～0.15m、長さ2m以上の南北溝で、

形態は SD23~26と似ている。それぞれの溝の規模は、SD23~26の一群に比べて多少ばらつきがあるもののほぼ同規模といえ、溝と溝との間隔も2~2.7mとややばらつきがあるが、南端が壊っていることから一群の遺構と考えられる。壊乱部分を含めて7本以上並行していたと考えられるが、検出範囲はSB15の桁行とほぼ重なる。すべて発掘区外北へ延びており、機能は不明である。SD23より新しく、SB15より古い。

**埋葬遺構SX33（網目部）[465次]** 直径0.8m 前後の平面円形の掘形が、東西9個、南北3個ずつ（一部破壊のため推定）並んだ遺構で、SB14の内部にすっぽり収まる意図的な配置であることが窺えることから、これらは甕を据えた掘形跡と考えられる。個々の土坑の深さは0.1~0.15mと比較的浅く、皿もしくは楕状を呈す。

#### C. その他の遺構

粘土探査坑群、溝及び水田跡がある [461・479次]。

良好な粘土が堆積している地点に集中して掘削されている土坑群があり、平安時代末から鎌倉時代初頭頃の粘土探査坑であると考えられる。北半と南半に分かれて分布しているが、南半部分は後世の破壊のため、形状、規模、重複関係が不明である。北半部分では、粘土探査坑が重複して掘られており、個々の形状と規模は、径1.2~3.1mの平面不整円形、もしくは長辺0.8~2.0mの平面隅丸長方形で、深さ0.3~1.0mである。埋土から中世の土器皿、瓦器、輸入陶磁器が出上している。

また、南北方向の溝を多數検出した。いずれも耕作に伴うものであると考えられる。掘削された時期は、重複関係及び出土遺物から、大路廃絶後から粘土探査坑掘削以前の時期と、粘土探査坑埋没以後の時期に分かれる。

なお、461次調査発掘区南東隅では、一段低くなっている部分（南北27m以上、東西1.5m以上）があり、その掘形は、底が平らで、側壁は急角度に立ち上がる。埋土には根の痕跡が多数あり、水田耕作跡の可能性が考えられる。埋土から時期不明の須恵器、土器等が少量出土したのみで、遺構の時期は不明である。

#### IV 出土遺物

461・479次調査では遺物整理箱26箱分出土した。土器は、縄文時代晩期の土器が2点、弥生時代後期～古墳時代前期初頭のものが遺物整理箱4箱分である。瓦は、軒丸瓦が3点、軒平瓦が3点、丸瓦・平瓦が遺物整理箱6箱分である。奈良時代以降の上飾器、須恵器、三彩陶器（奈良三彩）、綠釉陶器、土馬、輸入陶磁器が遺物整理箱11箱分出土した。木製品は、曲物底板1点、加工痕のある板材等が遺物整理箱1箱分、金属製品は鉄板1点、石器は剥片2点、鑄造関係遺物は轆羽口2点である。

465次調査では遺物整理箱26箱分出土した。瓦には、軒丸瓦2点、軒平瓦5点、磚21点がある。土器には、奈良時代の土器と、弥生時代木傾の土器（河川出土）がある。

以下、古い時代から順に遺物の概要をみていく。

#### A. 弥生時代の遺物

土器 壺（19）、器台（20）、鉢（21）、甕、高杯、手焰形土器がある。

19は、壺の頸部から体部である。頸部と体部の境に突帯を貼り付け、その上に刻み目を施した綾杉紋がある。体部上半には、上から櫛描直線紋、櫛描波状紋、櫛描直線紋がある。20は器台の体部で、上端と下端を欠く。内外面ともナデ調整している。透孔が上下二段に並んで配されている。21の鉢は、逆U字形の一対の把手が付く。内外面ともナデ調整している。

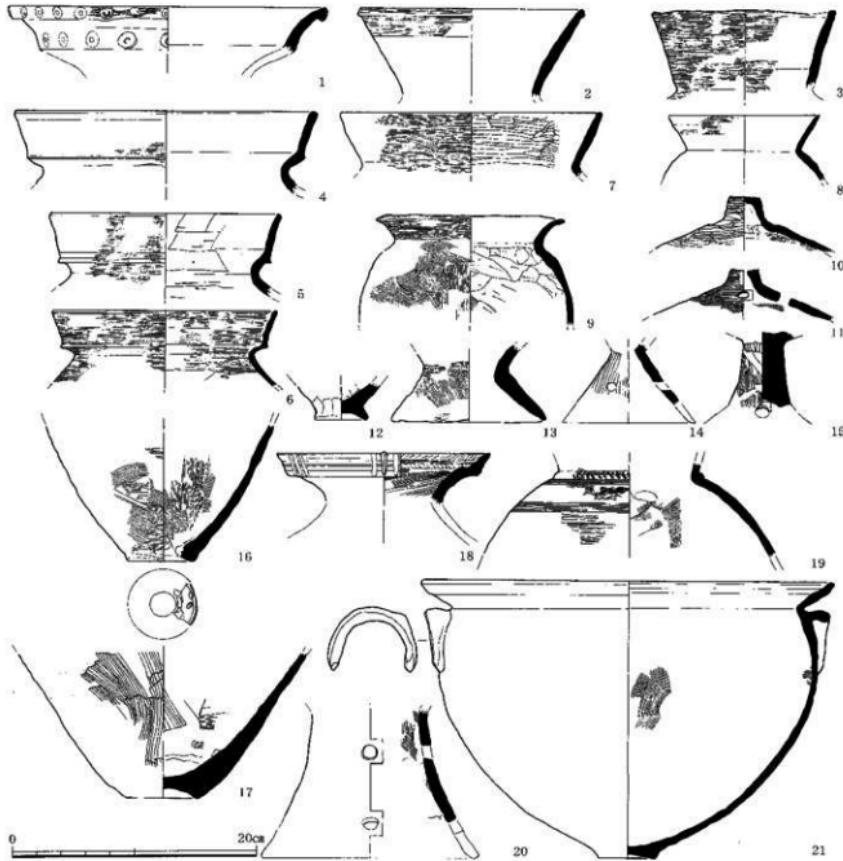
#### B. 古墳時代の遺物

土器 布留式土器の量が最も多いが、庄内式土器も若干ある。壺（1~3・8・17・18）、甕（4~7・9）、器台（13）、高杯（10・11・14・15）、器種不明品（12・16）がある。

1は、二重口縁壺の口縁部である。口縁端部外面に櫛描波状紋がみられ、その上と下段に円形浮紋を貼り付けている。3・8は、短頸直口壺の口縁部である。内外面とも横方向にナデ調整している。2は上端部を強くナデしており、稜線がみられる。8は直口壺の口縁部から肩部である。4~6は、山陰系の甕の口縁部である。外面はいずれも横方向のナデ調整をしているが、内面は、4・6にナデ調整、5にケズリ調整がある。7は甕の口縁部であ

る。外面は横方向のナデ調整がある。内面の横方向のミガキ調整からみて短頸直口壺の可能性もある。9は、甕の口縁部から体部である。口縁部外面は横方向にナデ調整、体部外面は斜方向にナデ調整、内面は斜方向にケズリ調整している。10・11・14・15は高杯脚部である。柱状部が中空で鋸部が大きく開いているもの（10・11）、柱状部がなく裾部が円錐状のもの（14）、柱状部が中実のもの（15）がある。いずれも外面はミガキ調整で、精緻に仕上げている。12の器種は不明であるが、

底面が上げ底状であり、外面は指圧圧痕が残っている。鉢の底部である可能性が高い。13は器台の脚部である。外面は斜方向のナデ調整、内面は横方向のナデ調整している。16は器種不明品で、体部上半以上を欠く。底面中央に穿孔があり、底部外面に米粒の圧痕が残っている。17は、短頸直口壺の底部である可能性がある。外面に縦方向のミガキ調整、内面にハケ調整をしている。18は、壺の口縁部である。端部外面には浅い凹線が2条巡り、その上に縦方向の棒状浮紋を3本1組で3箇所



第461次調査 出土弥生・古墳時代土器図 1/4

に貼り付けている。端部外面は櫛描列点紋を綾杉状に配している。口縁部内外面に赤色顔料の塗布がみられ、いわゆるバレススタイルといわれるものである。

16は淡灰色シルト・黄褐色シルト層（土層41）から、その他は河川10から出土した。

**鉄製品（22）** 板状の隅丸三角形で、表面は錆化が進行しているものの、地金の部分は比較的残りがよい。長さ4.9cm、幅2.5cm、厚さ0.5cm、重さ29.2gである。用途不明品であるが、鋳造鉄器の断片、鉄素材の可能性がある。河川10から出土。

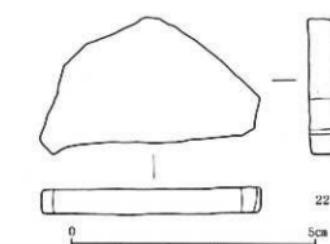
#### C. 奈良時代の遺物

**土器** 23（口絵6）は三彩陶器（奈良三彩）壺蓋。口径18.0cm、器高3.3cm、外面は褐、緑、淡

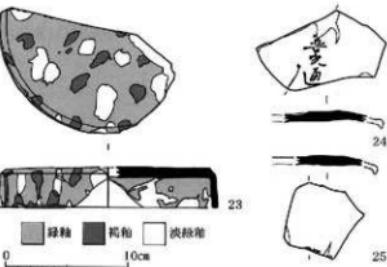
緑釉を斑状に厚く施す。褐釉の上には暗赤褐色の釉が重ねてある。内面は緑釉単色。胎土は軟質で灰白色に焼き上がっている。SD13Cから出土。

24（口絵7）・25は須恵器蓋で、24は外面上、25は内面に墨書がある。24は「普光通」と読める。25は「器」の上半部の可能性がある。24は479次調査発掘区西壁、25はSF12路面整地土から出土。

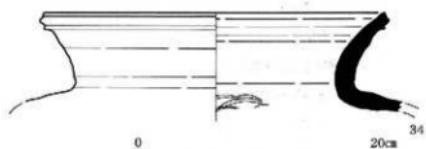
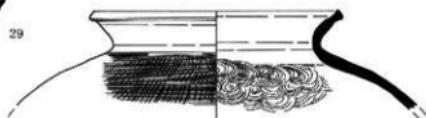
26は土師器皿Aで、内面から口縁部外面にヨコナデ、内面底部と口縁部下に晴紋を施す。27は土師器碗Cである。内面から口縁部外面にヨコナデ、外面下半にユビオサエ。28・30は須恵器杯B、29は杯Aである。28は高台に沿って内側に爪痕が廻る。31・32は土師器甕である。31は口縁部が上方に立ち上がり、胴部外面にハケ、口縁部及び内



河川10出土鉄製品図 1/1



第479次調査 出土三彩陶器、墨書き土器図 1/4



第465次調査 出土土器図 1/4

面にナデ調整。32は口縁端部が内傾し、口縁部内面にハケ調整を施す。33・34は須恵器壺。33は肩部外面にタタキの後力キメを施す。28～30はSB17から出土。他はSE25から出土。

**瓦磚** 軒瓦の型式と内訳は、軒丸瓦6229型式種別不明（SD13C出土）、6301型式J種、6313型式D種、6314型式A種（SD13C出土）、型式不明（SD13C出土）が各1点、計5点で、軒平瓦6532型式D種、6663型式C種、6685型式C種、6726型式D種、6726型式E種（SD13C出土）、6732型式Fb種、6732型式種別不明、型式不明（灰色砂屑出土）が各1点、計8点である。

**磚**（口絵8）21点のうち、寸法がある程度計測できるもの13点についてみると、幅約16.4～16.8cm、厚さ約4.1～4.4cmであり、完存する2点は、同じ大きさで、長さ約33cmである。主にSB18の柱掘形から出土した。

#### V.まとめ

調査の結果、繩紋時代晚期から中世までの各時代の遺構を確認することができた。

奈良時代以前の遺構については、繩紋時代晚期の貯蔵穴と考えられる土坑、弥生時代から古墳時代の河川跡と性格不明の土坑を確認した。河川付近ということから集落の中心からははずれた位置だったのだろう。しかし、弥生時代から古墳時代の遺物がまとめて出土することから、近隣にこの時代の集落が存在する可能性が高いといえる。また、旧地形を確認していくことによって遺跡の範囲もある程度復原できるのではないだろうか。

奈良時代の遺構については、建物の規模や配列、性格など十三坪宅地内の状況と同時に、東四坊大路の変遷も判明し重要な成果を得ることができたといえる。

以下、時代をおって当該地の土地利用の変遷を概観しながら、まとめてみたい。

繩紋時代晚期には、第479次発掘区南端部から第461次発掘区中央部にかけての範囲が谷地形になっていることがわかった。花粉分析の結果から周辺がシイ・カシを中心とする照葉樹林であることが判明し、その堅果を水漬け保存する貯蔵のため

の土坑を谷筋に沿って掘削している。谷は埋没していくにしたがって、次第に河川から湿地へと変化している。

第479次発掘区では、弥生時代中期の流路を確認し、弥生時代後期から古墳時代初頭の流路もほぼ同位置で確認している。それと繋がるかは不明であるが、第461次発掘区で大きく蛇行する同時期の河川跡を確認した。

奈良時代になると、平城京遷都により、東四坊大路が造営され、その側溝が掘削される。西側溝は3回にわたり改修されていることを確認している。造営当初の西側溝は、三条条間南小路を横切り、北に続いていることがわかった。その後、ほぼ同位置で掘り直されているが、その際には小路を横切らず、三条条間小路南側溝につながっていた可能性が高い。続く改修では、東にずれた位置に掘り直され、再び小路を横切る。路面のもともと河川があったところは、地盤が軟弱だったため、平城京造営後しばらくしてから、整地をしている。

また、西に隣接する宅地内の様相が465次調査で明らかになった。この十三坪には、大型の建物が建てられていたことが判明した。検出した大型の建物SB14は内部に埋甕と考えられる施設をもち、東西棟と、南北棟がL字形に配されている。西隣の十二坪内では比較的大型の建物がコの字状に配置された屋敷跡が検出されており、この坪でも同様な建物配置がなされていた可能性がある。また井戸SE22も位置からみて同時に存在していた可能性が高い。さらにSB14は通常の住居ではなく、何らかの製造もしくは貯蔵に関わる建物であった可能性が高く、他の施設の併存を考慮するならば、十二坪同様坪内の2分の1以上が宅地として利用されていた時期があったことも推定される。

したがって、この坪は、南に三条大路、東に東四坊大路が通る、三条四坊の角地にあたるということもあり、主要道路沿いのいわゆる一等地とみなされていたことが改めて確認できたといえる。

大路廃絶後は、道路から耕地へと変化し、12世紀から13世紀の間に粘土の採掘が行われていたことが判明した。

（松浦五輪美・久保清子・久保邦江）

## 5. 平城京跡（左京三条三坊三・六坪）の調査 第466・475次

調査名	調査次数	届出者名	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
平城京跡（左京三条三坊六坪）	466	個人	共同住宅建設	大宮町4丁目302-6, 303-2	H13. 9. 3 ~ 9.21	120m <sup>2</sup>	武田和哉
平城京跡（左京三条三坊三・六坪）	475	生和ホームズ（株）	共同住宅建設	大宮町4丁目350-2, はか	H14. 3.22 ~ 3.29	98m <sup>2</sup>	山前智敬

平城京左京三条三坊六坪では、平成13年度に2件の調査を実施した。第466次調査地は、坪の中央やや南東寄りに、第475次調査地は、坪の西辺に位置する。調査地の位置は離れているが、あわせて報告する。なお、六坪内では過去に調査事例が3件（県1986年度、市第120次、市第391次）あり、いずれの調査でも、奈良時代の遺構を検出している。以下、調査ごとに概要を記す。

**第475次調査** 三・六坪境小路の検出を目的に、98m<sup>2</sup>の発掘区を設定したが、地表面から地山上面までの深さが約2.7mに達し、壁面の勾配を考慮したため、地山上面での面積は約11m<sup>2</sup>となった。

発掘区内の基本的な層序は、上から、造成盛土、灰茶色粘土、灰色砂礫、灰色粘土と続き、灰褐色粘質土の地山（無遺物層）に至る。遺構の存する地山上面の標高は概ね60.7mである。

検出した遺構には、奈良時代の三・六坪境小路および同東西両側溝、中世の溝がある。いずれも南北方向あるいは北でやや東に振れる溝で、長さ0.5m分を確認した。

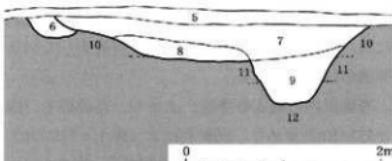
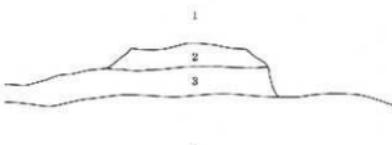
SD01は、発掘区中央で検出した溝。幅約0.6m、深さは約0.2mである。埋土から、奈良時代の土師器、須恵器、丸瓦、平瓦が出土した。重複関係から後述のSD03よりも古い。

SD04は、発掘区中央で検出した三・六坪境小路である。SD02は、その西側溝。幅3.0m以上、深さ約0.2m。埋土から奈良時代の土師器、須恵器、丸瓦、平瓦、磚が出土した。重複関係から後述のSD05よりも古い。SD03は、その東側溝。掘形は2段で、溝幅は上段で約3.1m、下段で約0.9m。深さは上段が約0.4m、下段を含めて約0.8m。埋土から、奈良時代中頃～末の土師器、須恵器、奈良時代の製塙土器、土馬、丸瓦、平瓦、磚、曲物



第466・475次調査 発掘区位置図 1/6,000

W  
LT: 63.5m  
E  
-17,384



- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| 1 造成盛土             | 7 灰色粘質土 (SD03理土)   |
| 2 黒色土 (耕土)         | 8 混灰色砂 (SD03堆土)    |
| 3 褐色粘土 (底土)        | 9 混青灰色粘質土 (SD03堆土) |
| 4 灰色砂礫             | 10 灰褐色粘質土 (地山)     |
| 5 灰色粘土             | 11 增粘灰色粘土 (地山)     |
| 6 混灰灰色粘質土 (SD01堆土) | 12 明灰白色粘土 (地山)     |

第475次調査 北壁土層図 1/50



第475次調査 発掘区 全景（北東から）

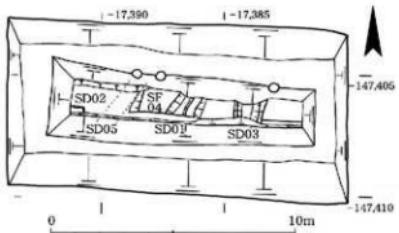
が出土したが、上段と下段の埋土とでは、出土遺物の型式の違いはない。したがって、上・下段とも同時に埋まり、上段は、形状からみて、流れが西にあふれた跡と考える。X=-146,406.500mラインでの溝心の座標は、上段はY=-17,384.965m、下段はY=-17,384.025mである。SD02の幅が不明ではあるが、市第391次調査（平成9年度）で、同西側溝を確認しており、その位置と幅を考慮に入れると、SF04幅は、溝心々距離にして上段で約6.6m、下段で約7.5mである。

SD05は、発掘区西で検出した溝。幅約0.8m、深さ約0.2m。埋土から奈良時代の土師器、須恵器、丸瓦、平瓦、軒平瓦（6691型式A種が1点）、13世紀の瓦質土器、14世紀の土師器が出土した。重複関係からSD02よりも新しい。（山前智敬）

**第466次調査** 調査地の西約120mには、佐保川が南流しており、その影響からか調査地周辺では湧水が著しく、比較的の地盤が軟弱である。また隣接地の調査（県1986年度、市第120次・昭和61年度）で、掘立柱建物を検出しており、その柱穴には、礎板等を用いて柱材の沈下対策をしている事例がいくつかある。

発掘区内的基本層序は、上から、造成盛土（厚さ約1.0m）があり、黒灰色粘土（耕土・約0.3m）、暗灰色砂礫（約0.2m）、青灰色細砂（約0.1m）、暗青灰色粘砂土（約0.2m）、暗灰色粘土（約0.1m）、暗灰色粘土（約0.2m）、暗茶灰色粘質土（約0.3m）、灰色砂質土（約0.1m）と続き、地表下約2.5mで暗褐色粘土（無遺物層）の地山に至る。

地山直上の灰色砂質土は、主に発掘区の中央から東側にかけて堆積し、奈良時代の遺構はこの層



第475次調査 遺構平面図 1/200

の上面から掘り込まれていた。この上面の標高は約61.4m、地山上面の標高は、発掘区東側では約61.4m、西側では約61.3mである。

検出遺構には、奈良時代の掘立柱建物1棟、掘立柱塀3条、溝がある。

SA06は、発掘区西側で検出した南北方向の掘立柱塀で、1間分（2.4m）を検出した。北側と南側はともに発掘区外へと続く。検出した2つの柱穴の柱材は、ともに東側に倒して抜き取った跡が見られる。

SA07は、発掘区中央で検出した掘立柱塀で、1間分（3.3m）を検出した。遺構の重複関係から、後述のSB08よりも古い。

SB08は、発掘区中央から東側にかけて検出した東西棟の掘立柱建物。東西3間（6.3m）、南北1間（2.7m）分を検出した。建物の北側と東側は、発掘区外へと続く。柱穴の配置からみて、西庇付建物とみられる。また遺構の重複関係から、後述のSA09よりも古い。

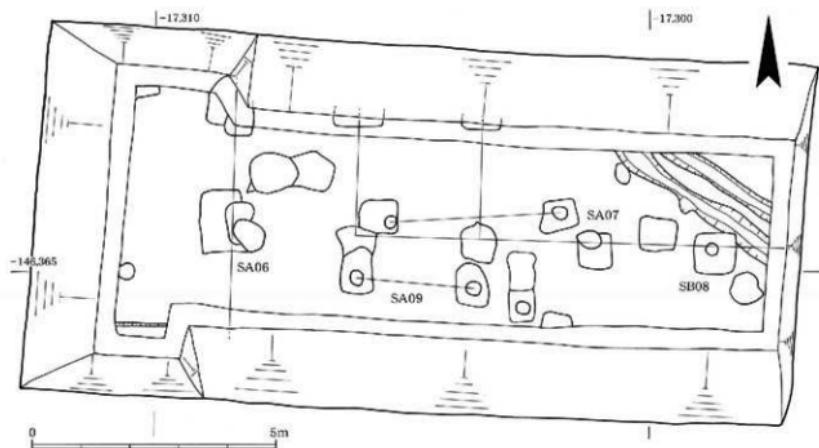
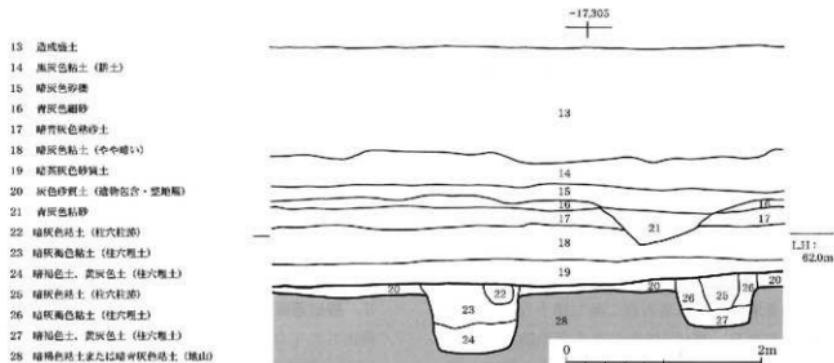
SA09は、発掘区中央で検出した掘立柱塀で、1間分（2.4m）を確認した。

今回の調査で検出した柱穴の遺存状況は、あまり良くないが、隣接地の調査と同様に、磚や須恵器等を使用して柱材の沈下対策をした例をいくつか確認した。また、掘立柱塀や建物は、検出数が少ないものの、重複があることからみて、いくつかの時期に分けられる。

なお、出土遺物は、隣接地の調査では、瓦磚類が多く出土しているものの、本調査地では、奈良時代軒瓦を含む瓦や土器が、遺物整理箱約4箱分の出土と、比較的少ない。（武田和哉）



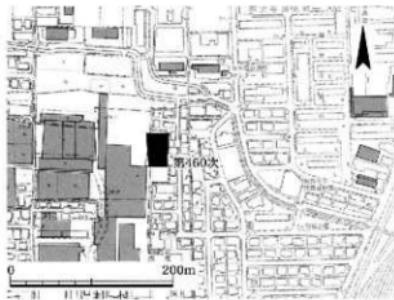
第466次調査 発掘区 全景（左より、西から・南から・東から）



第466次調査 発掘区 上：北壁土層図 1/50 下：遺構平面図 1/100

## 6. 平城京跡（右京二条二坊十五坪）の調査 第460次

調査次数	IJ 第460次	調査期間	平成13年5月21日～8月10日
事業名	近鉄西大寺駅南土地区画整理事業	調査面積	1,000m <sup>2</sup>
届出者名	奈良市長	調査担当者	松浦五輪美
調査地	横領町329、332-1		



第460次調査 発掘区位置図 1/6,000

## I. はじめに

本調査地は、平城京右京二条二坊十五坪の南半西端にあたり、平成5年度の奈良市の調査成果によれば、西二坊大路の一部が調査区内を通ると推定されている場所である。調査前の水田面は、西に一段低くなっている、畦が旧地形を反映しているものと考えられた。

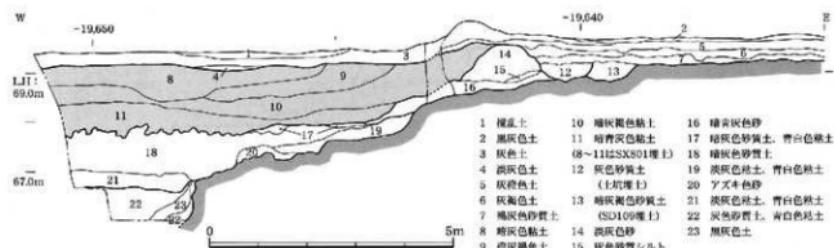
調査地の基本土層は、耕土以下、2～3枚の遺物包含層を挟んで、黄白色粘土または灰色砂の無遺物層（いわゆる地山）となり、この面が遺構の存

する面である。地表から遺構の存する面までの深さは約0.5mで、南に粘土、北に砂が広がっており、南東から北西に向かってやや下っている。標高は69.2～69.5mである。調査区西半には近世以降の池跡と思われる暗灰色粘土の厚い堆積があり、さらにその下層には流路と思われる砂層が続き、西へ向かって地山は深く削られている。この部分の土層は、耕土下に約1.3mの粘土層（SX801）があり、その縁に砂層が堆積している。粘土層の下は、約0.8mの砂質土をはさんで、西に向かって急激に落ち込んでいる（土層22以下）。この西側への落ち込みが西二坊大路東側溝である可能性があるが、確認はできなかった。

## II. 検出遺構

検出した主な遺構は、掘立柱建物7棟（SB201～207）、掘立柱塀2条（SA208・209）、井戸3基（SE501～503）、溝2条（SD104・109）、土坑4基（SK601～604）、池（SX801）である。

**掘立柱建物・塀** SB201は、桁行3間（5.4m）、梁間2間（3.6m）の東西棟建物と考えられ、主軸は北でやや東に振れる。SB202は、桁行4間（6m）以上、梁間2間（3m）以上の南北棟建物の南西隅



第460次調査 発掘区北壁（西半）土層図 1/100



第460次調査 発掘区全景（西から）

部と考えられる。主軸は北でやや西に振れている。SB203は、東西1間（2.1m）、南北2間（3.6m）分を検出したが、おそらく主軸が西で北に振れる東西棟建物になると思われる。SB204は、桁行4間（6.8m）、梁間2間（3.6m）の東西棟建物である。SB205は、桁行3間（5.4m）、梁間（4.8m）の南北棟建物である。SB206は、桁行4間（9.6m）、梁間2間（3.6m）の南北棟建物で、井戸SE503より古い。SB207は、桁行3間（6.3m）以上、梁間2間（4.2m）の東西棟建物で、井戸SE503より新しい。

SA208は、4間（8.4m）の東西塀である。SA209は、2間（3.6m）以上の東西塀としたが、建物の一部の可能性もある。

調査区内で検出した柱穴と考えられる小穴は数多く、遺構密度は高いが、建物跡として柱筋の通る掘形は少ない。特に調査区北半は方位にのって並ぶ柱列がほとんどなく、建物の軸も振れている。掘立柱建物および塀のうち、奈良時代に属する可能性が高いのはSB206、SA208のみである。

**溝** SD104は、幅0.9m以上、深さ0.3m以上の

南北溝で、約14m分確認した。8世紀後半の遺物が出土し、1点が井戸SE503出土品と接合した。この溝が西二坊大路東側溝である可能性が高い。

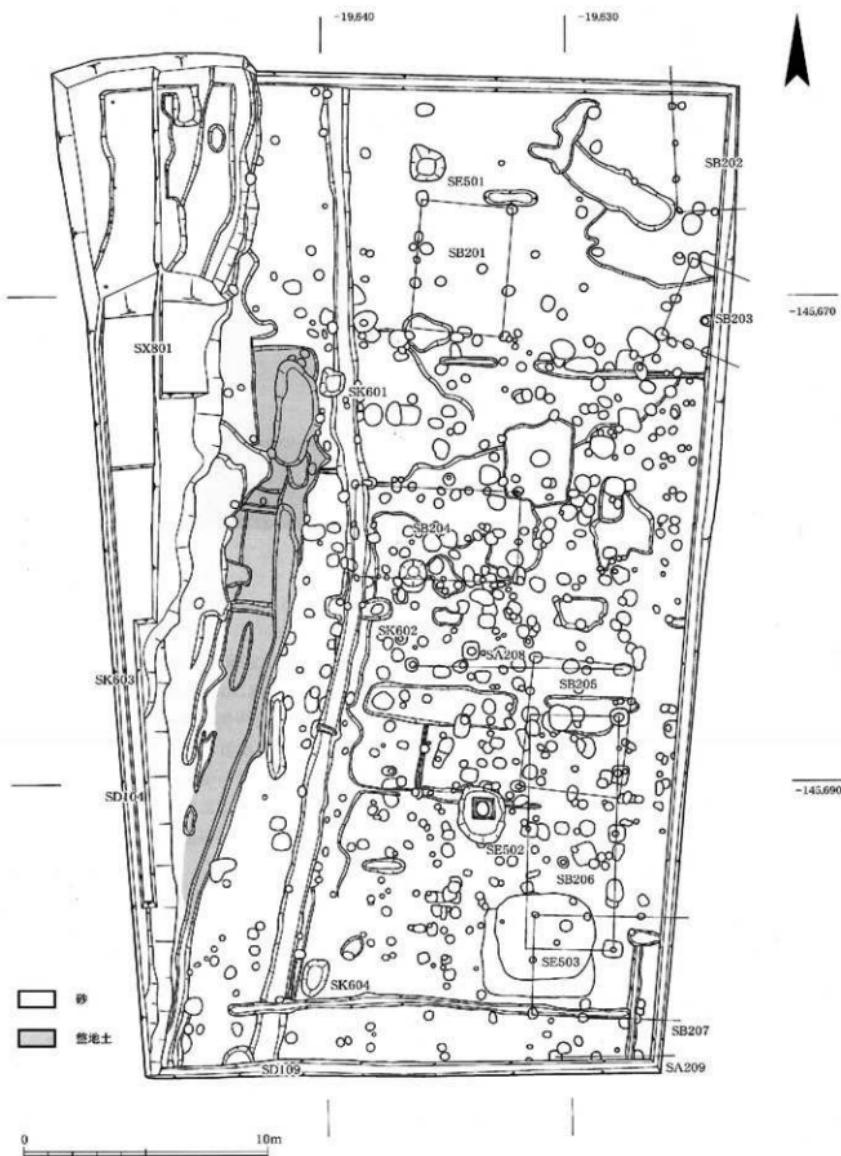
SD109は、幅約1m、深さ0.2～0.4mの南北溝で、調査区南半で西側に緩やかに曲がっている。埋土から12世紀前半頃の瓦器が多く出土した。

**土坑** SK601は、一辺約0.9mの平面隅丸方形の掘形で、深さ0.8mである。断面形は方形で、埋土上面から約0.2m下に須恵器平瓶が置かれたような状態で埋められていた。それ以下の埋土は、一度に埋め戻したような状態が観察でき、何らかの祭祀行為があったとも考えられる。時期不詳。

SK602は、直径約1.0mの平面円形の掘形で、深さ0.5mである。時期不詳。SK603は、東西1.0m以上、南北2.5m以上の平面楕円形の掘形と考えられ、深さは0.7m以上である。上半および北半はSX801に被覆されている。11世紀後半から12世紀初頭の遺物が出土した。

SK604は、東西約1.0m、南北約1.5mの平面楕円形の掘形で、深さ約0.4mである。時期不詳。

**井戸** SE501は、東西約1.3m、南北約1.2mの



第460次調査 造構平面図 1/200

平面方形の掘形で、深さ約1.4mである。枠は全て抜き取られていた。8世紀後半の遺物が出土した。

SE502は、東西約2.0m、南北約2.3mの平面横円形の掘形で、深さ約1.9mである。縦板組横桟留の枠をもっていたと考えられるが枠の大半は残っていない。底部中央に約0.9m四方の横桟枠組と、その内側に一回り小さい約0.7m四方の横桟枠組が一組ずつ残り、両者に挟まれた隙間に若干の縦板残欠がある。外枠より内側はさらに約0.4m掘り込まれ、その壁面を櫛・瓦・磚で補強し、最下部には高さ17cm、直径約60cmの曲物を据えて濾過装置としている。10世紀中頃の遺物が出土した。

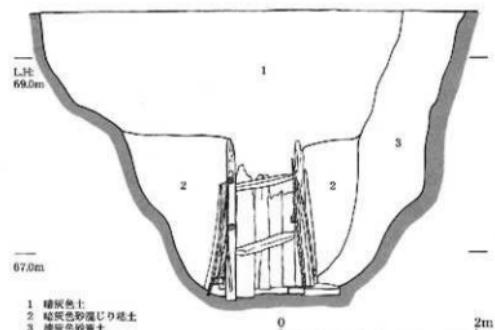
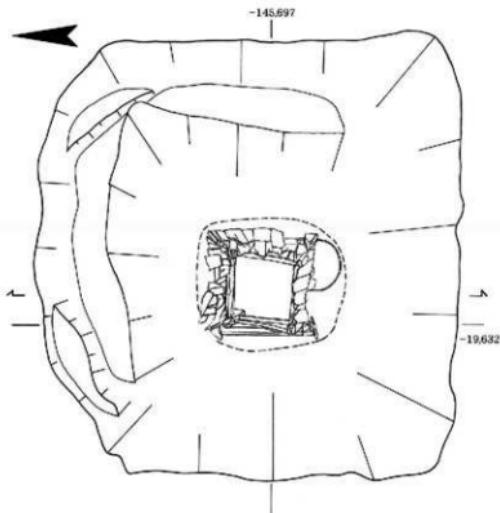
SE503は、東西約4.5m、南北約4.2mの平面方形の掘形で、深さ約2.9mである。この掘形の北東よりに約3.5m四方の方形の枠抜き取り跡が重なる。井戸枠は、0.6m四方の縦板組隅柱横桟留であるが、この枠を囲むように一回り大きな縦板組の枠が一部残っており、井戸が作り直されたものと解釈できる。さらに南東隅柱の下には枠外にかけて曲物が据えられており、当初は曲物を濾過装置としてもつ井戸があったと考えられる。したがって、SE503は、2回の作り替えが行われたものと推定される。8世紀後半から末頃の遺物が出土した。

その他 SX801は池跡と思われる。暗灰色粘土で埋まっており、汀には杭列や、さらにそれに竹を通した護岸施設が残っていた。17世紀後半から18世紀初頭の遺物が出土した。

以上の遺構は、ほとんど溝SD109以東で検出したものであり、先述のとおり西側は後後に大きく地形が変わっているようである。SD109以西で検出した浅い溝や上色の変化ラインは、おお



井戸SE503（西から）



井戸SE503 平面・立断面図 1/50

むねSD109に平行し、磁北に対して斜行している。このことは、それらの遺構もしくは地形がSD109と近い時期（11世紀後半～12世紀前半）に形成されたことを示していると考えられる。それが調査前の水田の区画割りにも影響していることがわかる。

調査区西端付近は奈良時代に西二坊大路が通っていたと推定されており、さらに近隣の調査から、大路が宅地よりも低い切り通し状の道路となっていた可能性が高い。SX801の周間に広がる砂層（薄い網部）は切り通し状になっていた大路に堆積したものと思われ、氾濫等による乱れは考えられるものの大路の名残をとどめているものと考えられる。この砂層にも12世紀の瓦器が含まれ、廃都後しばらくは大路の形状をとどめながら、流路として機能していたものと思われる。この砂層の堆積ラインに平行して溝SD109は掘られている。

当初検出が期待された西二坊大路の東側溝は明確な証拠をもって検出することはできなかった。しかし、調査区南西隅の砂層下で検出した溝SD104が、これまでの調査成果による推定位置と合致し、東側溝である可能性が高い。埋土上半は上層と同じ砂で埋まっており、下部約0.1mが本来の側溝埋土のようである。北壁土層にみられる最下層（22層）の急激な落ち込みが、この溝SD104と繋がるかどうかは不明であるが、位置的に東側溝の可能性が考えられる。

以上の遺構に関しては、土層観察や柱穴の深さなどから考えると、奈良時代の生活面がかなり削平されていることが推測され、検出した多数の小穴のほとんどは12世紀以降のものと考えられる。おそらく溝SD109によって改めて土地区分がなされた後、その東側が宅地として利用されたのであろう。

今回の調査によって、西二坊大路は後世の掘削によって塹されてはいるが、側溝の一部は残存している可能性が高いことがわかった。また、12世紀以降に新たな宅地境界を設けたと考えられる様相が判明した。奈良時代の遺構については、特に調査区北半では深い遺構を除いて残存している可能性が低いと判断される。

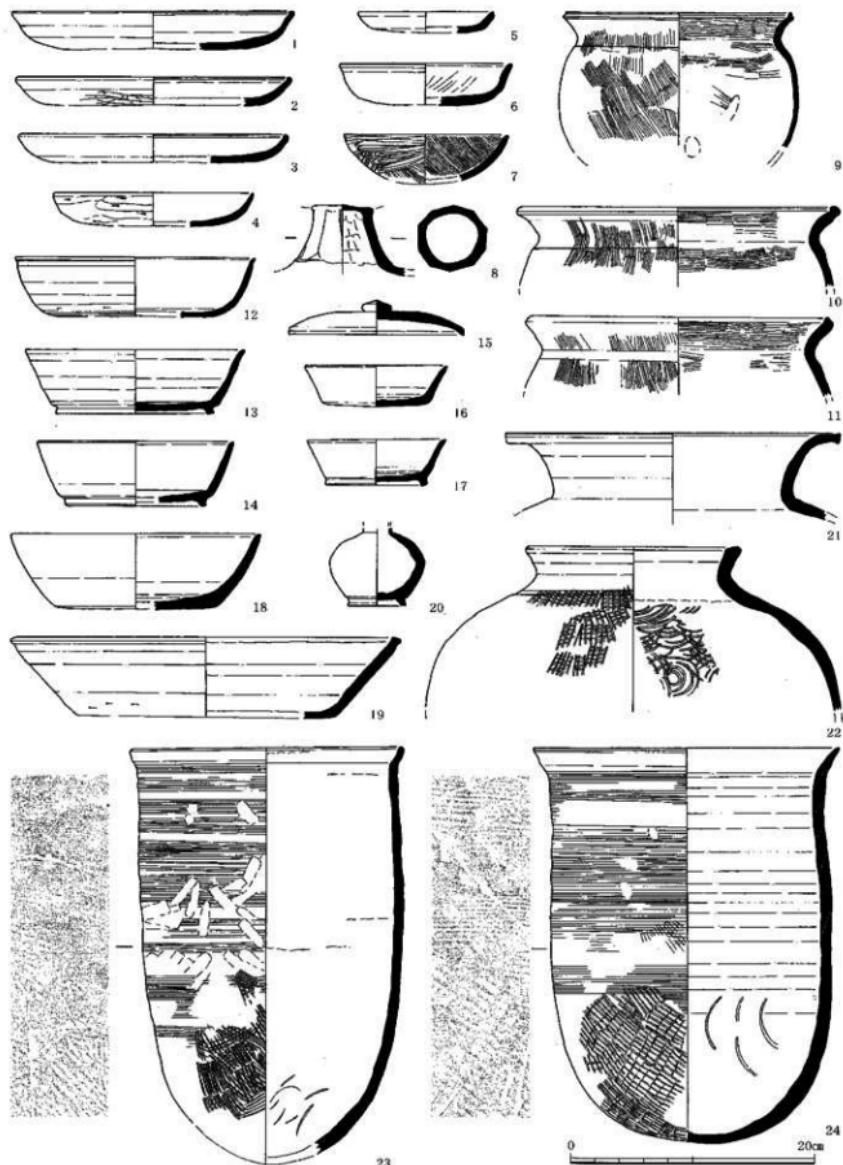
### III. 出土遺物

土器が整理箱110箱分、瓦が70箱分、木製品が4箱分出土した。奈良時代のものと12世紀以降のものとに大きく分かれるが、奈良時代の遺物の大半を占める井戸SE503出土土器について述べる。

土師器には、杯、皿、椀、壺、高杯がある。1～4は皿A。口径22cm前後で口縁端部が内側するものと口径16cm前後で口縁部が直立するものがある。1～3は内外面ヨコナデで、2のみ底部外面ケズリ調整。4は内面ヨコナデ、外側ケズリ調整。5は皿C。内外面ヨコナデ調整。6は杯A。内面及び外面上半はヨコナデ、底部外面にユビオサエが残る。内面に暗紋。7は椀A。内面はナデ、外側は斜め方向のミガキの後、上半部はさらに横方向のミガキ。8は高杯。脚部のみで、巻上げ成形と思われる。杯部は接着面ではざれる。外側はハケメの後、面取りされており、裾部はヨコナデ調整。9～11は壺。口径19cm前後のものと24cm前後のものとがある。全て口縁端部は内側に肥厚させ、内外面ともハケメ、口縁端部はヨコナデ調整。

須恵器には、杯、鉢、盤、壺、壺がある。12は杯E、16は杯A、13・14・17は杯B。杯A・Bとともに口径16cm以上のものと12cm前後のものとがある。両者とも内外面ロクロナデ、底部外面ケズリ調整である。12は底部からの立上り部分がロクロケズリ調整。15は杯蓋。頂部外側はロクロケズリ、口縁部は内外面ロクロナデ、内面は不定方向のナデによる調整。18は平鉢。底部外側から体部下半にかけてロクロケズリ、他は内外面ロクロナデ調整。ほかに鉢Aもある。19は盤。底部外側から体部下半にかけてロクロケズリ、他は内外面ロクロナデ調整。20は壺M。ほかに縦状の突帯を縦横に貼り付け、竹管紋を施した新羅系の趣のある壺がある。21は壺A、22は壺B、23・24は北陸系の長胴壺で、23はやや内側する口縁部、24は外に開く口縁部をもつ。外面上半部はカキメ、下半から底部はタタキが施されるが、タタキのほうは後から施されている。内面は外側のカキメ調整に対応する部分がナデ調整で、底部には當て具痕が残る。

このほか、「分銅」形土製品（口絵4）、縄釉陶器耳皿（口絵5）がある。  
(松浦五輪美)



井戸SI2503出土土器図 1/4

## 7. 平城京跡（右京二条二坊七坪）の調査 第473次

調査次数	HJ 第473次	調査期間	平成14年1月18日～2月22日
事業名	宗教施設建設	調査面積	400m <sup>2</sup>
届出者名	神慈秀明会	調査担当者	武田和哉
調査地	西大寺国見町1丁目2137-62		



第473次調査 発掘区位置図 1/6,000

調査地は、平城京の条坊復原では右京二条二坊の中央より西寄りの場所に該当している。調査地の周辺では、過去に調査事例が2件あり、南隣の調査（市第319次調査、平成6年度）では、中世以降に埋没したと推定される南北方向の河川状の遺構や掘立柱塀、土坑などが検出されており、このうち河川状遺構については、西二坊間路の側溝との関連性が指摘されている。また調査地の北約40mで実施された調査（県、1993～1994年度）<sup>1)</sup>では、西二坊間路と二条条間北小路の各側溝や奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、土坑、中世の掘立柱建物や井戸など、多くの遺構を検出した。なお、両調査で検出した地山の標高には差があり、調査地南隣の調査では約68.0mであるのに対し、北隣の調査では約68.8mである。

今回の調査では、付近の旧地形にも留意しつつ、市第319次調査で検出した河川状遺構の続きの確認と、奈良時代の遺構の検出を主な目的として、約25m×15mの規模で発掘区を設定した。

発掘区内の基本層序は、北と南とでは若干異なり、北では造成土（約1.2m）以下、黒褐色粘土（耕土・約0.2m）、暗灰色土（約0.1m）、茶褐色粘土上または砂（約0.1m）、暗褐色土（約0.2m）、暗灰色砂（約0.1m）、黄灰色粘土と灰色砂の互層（約0.1m）と続き、地表下約2.0mで黄灰色粘土の地山（無遺物層）に至る。地山上面の標高は約68.4mである。

また南では、造成土（約1.5m）以下、黒褐色粘土（耕土・約0.2m）、暗灰色土（約0.1m）、暗灰色粘土（約0.2m）、灰色砂（約0.1m）、暗灰色砂（約0.1m）と続き、地表下約2.2mで黄灰色粘土の地山（無遺物層）に至る。地山上面の標高は約68.2mである。

発掘区の中央付近には、水田の畦畔があって、これを境にして南側では地形が一段低くなっている、さらに、発掘区の西へ行くほど徐々に低くなる傾向がある。

検出遺構 奈良時代の井戸1基、中世頃に埋没したとみられる河川と河川状遺構がある。

SE01は、発掘区南東部で検出した井戸。枠材は既に抜き取られていて残存しない。掘形は南北方向に長い平面椭円形を呈し、南側は発掘区外へと続く。南北径は検出した分で約3.8m、東西径は約2.8m、最大深は約3.8mを測る。埋上からは奈良時代の土器片や瓦片が大量に出土した。また断面の土層観察から、枠材を抜き取った後に、人為的に埋めた形跡が確認されている。

SK02は、発掘区西側で検出した河川状遺構。前述の南隣での調査で検出した遺構の続きと考えられる。北北西から南南東の方向に流れていると

1) 奈良県立橿原考古学研究所「平城京右京二条二坊七・八・九・十坪発掘調査報告」（奈良県文化財調査報告書第79集）1998

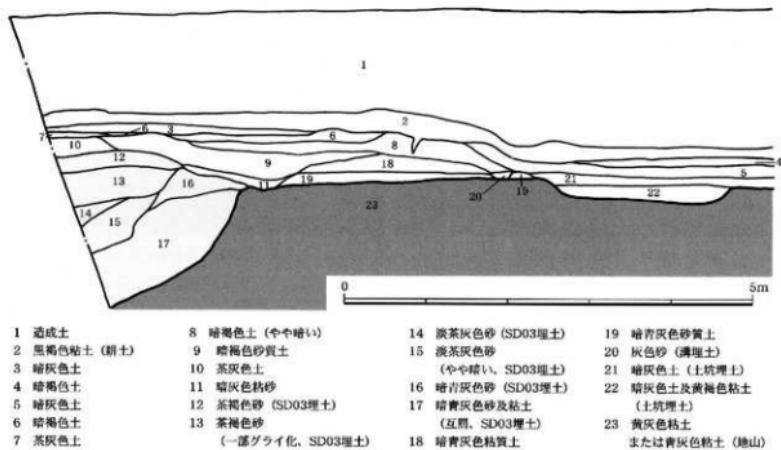
I 平城京跡の調査

N15° E

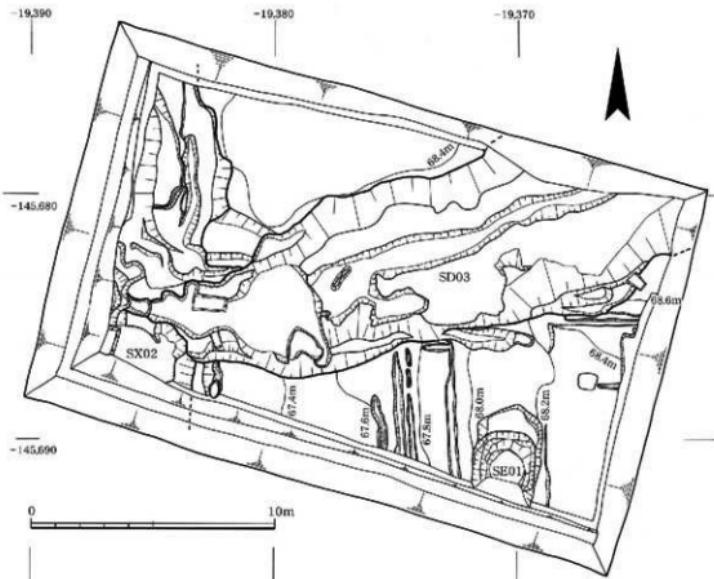
-145.685

S15° W

L.H : 71.0m



第473次調査 発掘区東壁(北半) 土層図 1/60



第473次調査 漢構平面図 1/200



第473次調査 発掘区全景（北東から）



第473次調査 発掘区全景（北から）



第473次調査 発掘区全景（南西から）



井戸SE01全景（南から）

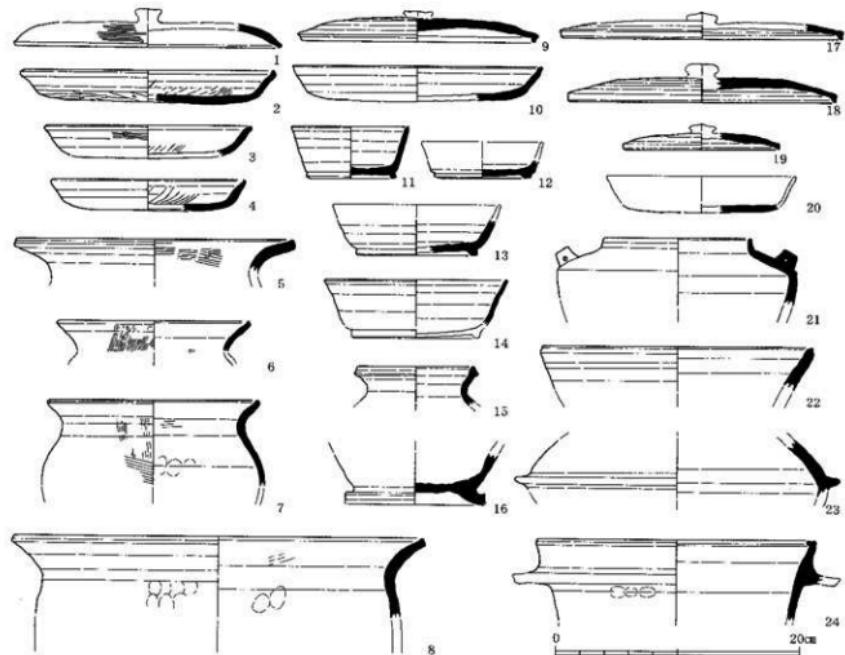
思われるが、発掘区内ではその東側部分を検出したのみで、主要部分は発掘区の西外側にあるものと推測される。幅は3.5m以上、深さは最も深い発掘区の南西隅部分では約2.4mにも達する。断面の土層観察から、堆積層は、大きく分けて少なくとも2層の堆積が認められる。下層の埋土からは奈良時代の土器片・瓦片が出土し、上層には奈良時代の遺物に混じって、12～13世紀の瓦器片も含まれている。大きく2時期にわたって埋まっており、最終的な埋没はそれ以降の時期と考えられる。ただし、西二坊間路との関連等については、明確な手かがりが得られなかった。

SD03は、発掘区北東から南西に向かって流れる流路である。幅は3.8～6.4mと一定でない。深さは、比較的残存状況の良い発掘区北東部分で約1.6m、また発掘区南西部では約0.8mを測るが、溝底の標高は、北東部・南西部ともに概ね66.6～66.7mである。埋土のはほとんどは粗砂で占められ、あ

る程度の水流があったことがうかがわれる。埋土からは奈良時代の土器片、瓦片が出土したが、黒色土器や土師器（14～15世紀）、施釉陶器（12～15世紀）等も若干ながら含まれている。

なお、近世以降の土坑を発掘区中央で検出した。

今回の調査では、奈良時代の建物や塀などは検出できなかった。これについては、後世のSX02やSX03等の氾濫や耕作によって当時の地表面が削平されたことの影響が大きいとみられる。ただし、本調査地の南側と北側とで実施した調査では、遺構の存する地山上面の標高に差があるにもかかわらず、いずれも掘立柱穴を検出していることを考慮するならば、必ずしも氾濫や耕作による削平のみでは説明できないように思われる。あるいは、調査地がSX02やSD03など流路等の集中する場所に該当して、居住には適さない環境であった可能性もある。この問題については、今後の周辺での調査成果を待って再検討したい。（武田和哉）



井戸SE01出土土器図 1/4

**出土遺物** 土器、土製品、瓦、磚、桃核、木製品、金属製品、サヌカイト片が、遺物整理箱で約28箱分出土した。大半は瓦で、約22箱分ある。墨書き上器が10点(SE02から3点、遺物包含層から7点)あるが、明確に判読できるものは少ない。

ここでは、SE01の井戸棒抜き取り穴から出土した土器の概要を記す。細片が多いが、奈良時代後半の良好な資料である。

土師器には、杯A・C、杯蓋、皿A、甕、羽釜がある。杯C(3)は、口縁部外面をヨコナデのちミガキ。一段の斜放射暗紋が残る。皿Aは、口径21.0cm(2)と16.0cm(4)があり、一段の斜放射暗紋を施す。2の底部外面はケズリ。杯蓋(1)は、頂部を丁寧なミガキで調整。甕(5~8)は、口縁部の特徴から3つに分類できる<sup>2)</sup>。7は口縁端部の内側が小さく肥厚するA形態。5・8は、口縁

端部が外傾するC形態。6は、内弯しながら斜上方に開く口縁部で、口縁端部の内側が玉縁状に小さく肥厚するM形態。ここでは、A形態以外の甕が比較的多い。24は、体部上半に突帯が巡り、羽釜になると考えられる。

須恵器には、杯A・B、杯蓋、皿A、壺B、壺、鉢、横瓶、甕がある。杯A(20)と杯B(11~14)、皿A(10)の底部外面はヘラカリ。20の底部外面に「大」か「天」と読める墨書がある。蓋は口径が20.0cm以上(9・17・18)と13cm(19)がある。18の頂部外面はロクロケズリ。壺B(21)は、肩部に一对の把手がつく。壺(16)は、体部下半に淡緑色の自然釉がかかる。23は、体部に断面三角形状の突帯が巡る甕と考えられる。この他に、漆が付着する壺の体部片が7点ある。鉢(22)、横瓶(15)の口縁部は、ロクロナデ調整。(三好美穂)

2) 古代の土器研究会『古代の土器4 瓦焼具(道鏡)』1996

## 8. 平城京跡（左京五条五坊八坪）の調査 第472次

調査次数	HJ 第472次	調査期間	平成13年11月20日～12月6日
事業名	共同住宅建設	調査面積	145m <sup>2</sup>
届出者名	猪坂光春	調査担当者	武田和哉
調査地	三条本町59-3, -5		



第472次調査 発掘区位置図 1/6,000

調査地は、平城京の条坊復原では、左京五条五坊八坪の北東隅付近に該当している。調査地北側の道路を隔てた隣接地では、過去に調査事例が2件あり（市第408-2次調査、平成10年度及び市第429-2次調査、平成11年度）、弥生時代の河川が検出されている。今回の調査では、この弥生時代の河川の続きの確認と奈良時代遺構の検出を主な目的として、東西約17m、南北約8.5mの規模で発掘区を設定した。

発掘区内の基本層序は、上から、造成盛土（約0.7～0.8m）、黒灰色粘土（耕土・約0.1m）、暗灰色土（約0.1m）と続き、発掘区の中央から北側の部分を中心にさらに茶褐色土（0.2～0.3m）、橙灰色砂礫（0.1～0.3m）、淡青灰色砂礫（0.1～0.2m）の堆積があり、地表下約1.2～1.8mで黄灰色粘土もしくは礫土の地山（無遺物層）に至る。遺構面は地山上面で、その標高は、発掘区南辺で65.5mである。

検出した遺構は、弥生時代の土坑、近世の溝1条、性格不明の遺構などがある。

SK01は、発掘区北辺中央付近で検出した土坑

である。平面梢円形を呈し、長径約0.6m、短径約0.55m、深さは約0.5mである。埋土からは弥生時代後期の土器が出上した。

SD02は、発掘区北東から南西に向かって流れる河川である。幅は0.3～1.6mと広狭があり、深さは北東部から中央付近では0.1m程度であるが、南東部では急激に深くなつて、南東隅では約0.4mを測る。埋土からは、奈良時代の土器に混じって、近世の陶磁器片が出土した。

SX03は、発掘区東側で検出した性格不明の遺構である。北・東・南側は発掘区外へと続く。北東隅が最も深く約0.4mを測る。埋土は茶褐色土や茶褐色礫土、黄灰色粘土に分かれ、遺物は土師器あるいは弥生土器の小片がごくわずかに出土するのみである。詳細な時期は特定できない。あるいは東に下る谷地形の一部となる可能性もある。

この他には、小穴をいくつか検出したが、遺存状況が良好でなく、遺物もごくわずかしか出土せず、時期や性格は不明である。

また、発掘区の北西部分を中心に、杭列を多数検出した。径10cm前後の杭を使用し、0.3～0.5m間隔で、地山上面から列を成して打込まれている。おおよそ6列ほどのまとまりが確認できる。方向は、どの列も完全には一致していないが、概ね北東から南西にかけての方位を示す。一見してSD02と平行するように連なっているが、両者の関係は明確でない。なお、奈良時代の遺構は確認できなかった。

遺物は、遺物整理箱約7箱分が出土した。弥生時代の土器が最も多く、奈良時代須恵器・土師器・瓦の破片や、近世以降の陶磁器片、銭貨（寛永通宝）なども含まれる。

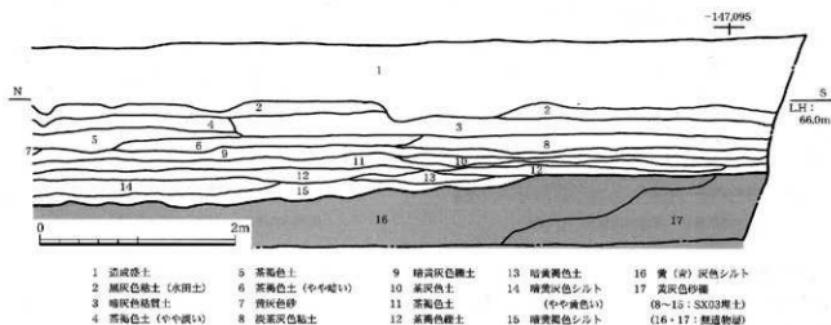
（武田和哉）



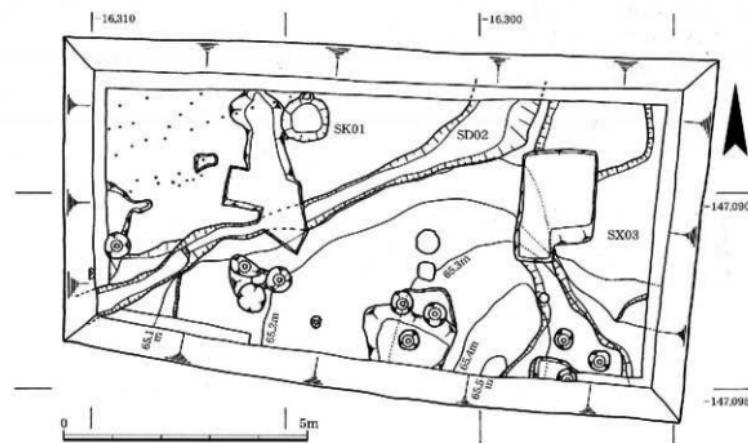
第472次調査 発掘区全景（東から）



第472次調査 発掘区全景（北西から）



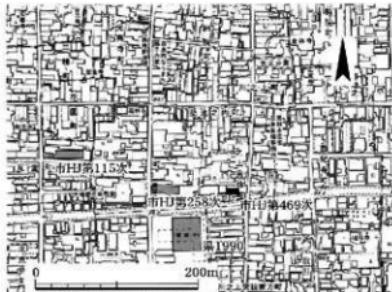
第472次調査 発掘区東壁土層図 1/50



第472次調査 遺構平面図 1/100

## 9. 平城京跡（左京五条七坊六坪）・奈良町遺跡の調査 第469次

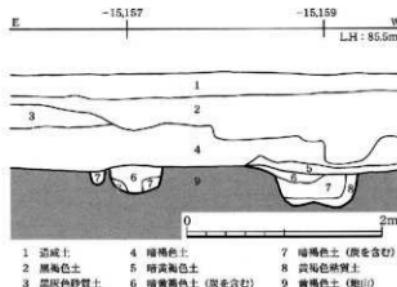
調査次数	HJ 第469次	調査期間	平成13年9月17日～10月4日
事業名	病院建設	調査面積	120m <sup>2</sup>
届出者名	博愛会松倉病院	調査担当者	秋山成人
調査地	川之上突抜北方町16-1		



第469次調査 発掘区位置図 1/6,000

調査地は、平城京条坊復原によると、左京五条七坊六坪の東辺北寄りに位置し、東七坊々間路に面する。周辺の調査では、西隣接地（HJ第258次・平成4年度）で、鎌倉時代から江戸時代までの遺構を検出しているが、平城京に関わる遺構が見つかっていない。今回の調査は、平城京及び奈良町遺跡の遺構の確認を目的として実施した。

発掘区の層序は、上から造成土、黒褐色土、黒灰色砂質土、暗褐色土、暗黃褐色土と続き、地表下1.2mで黄褐色土の地山（無遺物層）に至る。地

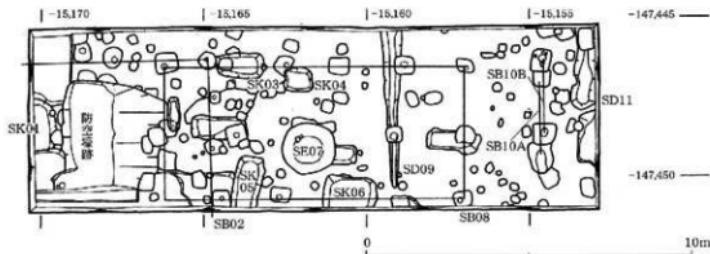


第469次調査 発掘区南壁土層図 1/50

山上面の標高は概ね74.1mである。

検出遺構には、奈良・平安時代の掘立柱建物・土坑、鎌倉時代の溝、江戸時代の溝・井戸・土坑、時期不詳の掘立柱建物がある。また発掘区の西端では、太平洋戦争中に築かれた防空壕の抜取跡と考えられる落込みを検出した。

奈良・平安時代の遺構 SB10Aは、発掘区東で検出した。掘立柱辨又は東に聞く門の可能性がある。SB10Bは、その建替とみられる。いずれも南北1間（2.3m）である。Aの柱穴から8世紀の土



第469次調査 遺構平面図 1/150

師器皿・甕が、Bの柱穴から8世紀の土師器杯・皿・甕、須恵器杯・皿・壺・甕が出土した。

SB08は、発掘区中央で検出した桁行5間（9m）、梁間2間（4.1m）の東西棟掘立柱建物で、桁行の両側からそれぞれ1間目に間仕切りの柱穴がある。柱間寸法は、桁行1.8m等間、梁間が2.1m等間。柱穴から8世紀末～9世紀の土師器皿・甕、須恵器杯・壺・甕、黒色土器A類碗が出土した。

SK01は、発掘区西辺で検出した平面不整形掘形の土坑。東西0.7m以上、南北1.7m以上、深さ0.13m。埋土は、暗褐色土（炭含む）で、8世紀末～9世紀初頭の土師器皿、製塩土器が出土した。

**鎌倉時代の遺構** SD11は、発掘区北東隅で検出した南北溝で、長さ2.9m以上、幅0.77m、深さ0.17mである。埋土は褐色土で、13世紀の土師器皿、瓦器碗、瓦質土器鉢が出土した。

**江戸時代の遺構** SD09は、発掘区中央やや東で検出した南北溝。長さ4.9m以上、幅0.6m、深さ0.2mである。埋土は茶褐色土で、16世紀後半～17世紀の瓦質土器擂鉢、土師器皿が出土した。SK03～06は、発掘区中央付近で検出した平面方形掘形の土坑である。このうち、SK03の規模は、長辺約1.5m、短辺約0.8m、深さ約0.2mである。いずれも埋土は黒褐色土で、17世紀～18世紀前半の土師器皿・炮烙、瓦質土器壺、肥前系陶器碗、信楽産陶器鉢、丸・平瓦、鐵（寛永通宝）、鐵釘、櫛の羽口、鐵滓、銅滓が出土した。鑄造関連遺構の可能性がある。

SE07は、発掘区中央で検出した平面円形掘形の井戸で、掘形は2段掘りで、上段が径1.64m、深さ0.66m、下段が径0.9m、深さは4.4m。枠は、上段では径20～30cmの自然石が一部残り、積上げていたと思われる。下段は素掘りである。埋土は黒褐色土で、17世紀～18世紀の土師器皿・炮烙、瓦質土器深鉢・擂鉢・壺、肥前系陶磁器碗・皿、瀬戸美濃系陶器擂鉢・甕、丹波産陶器擂鉢、青花皿・軒丸瓦、丸・平瓦が出土した。

その他の遺構 SB02は、発掘区西半で検出した掘立柱建物である。東西、南北とも1間（2.8m）分を検出した。重複関係からSK05よりも古いが、遺物が出土せず、時期不詳。

（秋山成人）



第469次調査 発掘区全景（東から）



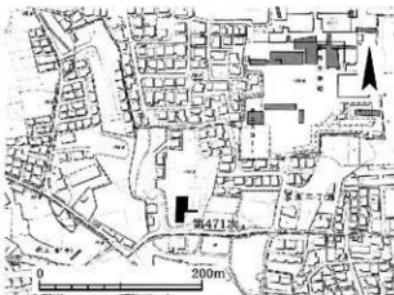
第469次調査 発掘区全景（西から）



井戸SE07（南から）

## 10. 平城京跡（右京五条四坊五坪）の調査 第471次

調査次数	HJ 第471次	調査期間	平成13年11月14日～11月29日
事業名	畑地造成	調査面積	388m <sup>2</sup>
届出者名	個人	調査担当者	秋山成人
調査地	五条3丁目914、915		



第471次調査 発掘区位置図 1/6,000

調査地は、西ノ京丘陵の北から南へ延びる尾根の南端に位置する。平城京条坊復原では、右京五条四坊五坪の南西に位置し、五条大路に面する。

今回の調査は、平城京の西辺地域に条坊が施工されていたかを確認することを目的に行う。

発掘区内の層序は、上から造成土、淡灰色土、黄褐色土、地山（無遺物層）である赤褐色土となる。地山上面の標高は、発掘区北東隅が78.97m、南西隅が77.55mで、北から南へ下降する。

検出遺構には、奈良時代の掘立柱建物、井戸、土坑、近・現代の溝（灌漑用水路）、時期不明の溝がある。

**SB01** 発掘区北端で検出した南北棟掘立柱建物である。桁行1間（1.5m）以上、梁間2間（2.6m）分を検出した。梁間の柱間寸法は、1.3m等間である。柱穴から8世紀の土師器甕、須恵器甕が出土した。

**SB02** 発掘区北端で検出した南北棟掘立柱建物である。桁行2間（4.8m）以上、梁間2間（3.6m）で、梁間中央の柱穴が削平されたと考えられる。桁行の柱間寸法は、2.4m等間である。

**SB03** 発掘区北で検出した桁行2間（4.2m）、梁間2間（3.6m）の南北棟掘立柱建物である。柱間寸法は、桁行2.1m等間、梁間1.8m等間である。

**SB04** 発掘区中央で検出した桁行3間（3.9m）、梁間2間（3.0m）の南北棟掘立柱建物である。柱間寸法は、桁行が北から0.9、1.5、1.5m、梁間が1.5m等間である。

**SB05** 発掘区中央西よりで検出した桁行5間（9.6m）、梁間2間（3.6m）の南北棟掘立柱建物である。柱間寸法は、桁行両端各1間が2.1m、その間が1.8m等間、梁間が1.8m等間である。柱穴から8世紀の須恵器甕・杯蓋が出土した。

**SA06** 発掘区東で検出した南北3間（6m）の掘立柱屏である。柱間寸法は、北から、1.8、1.8、2.4mである。柱穴から土師器が出土した。

**SK07** 発掘区西辺で検出した平面不整形掘形の土坑である。規模は、東西1.25m、南北5.2m、深さ0.28mである。埋土は黄褐色土で、8世紀の土師器甕、須恵器甕・甕が出土した。

**SE08** 発掘区南辺寄りで検出した平面円形掘形の井戸である。径2.8m、深さ2m以上である。埋土は褐色土で、8世紀中頃の土師器甕・皿・壺・甕、須恵器甕・杯蓋・壺・甕、丸・平瓦が出土した。崩壊の危険があり、底まで掘れなかった。

**SD09** 発掘区南辺で検出した、東西に延びる溝である。長さ9.8m以上、幅0.7m以上、深さ0.3m以上である。埋土は暗灰色土である。この溝は、その位置からみて、五条大路北側溝、又は雨落ち溝とも考えられるが、全貌が不明なうえ、遺物が出土せず、時期が不明である。

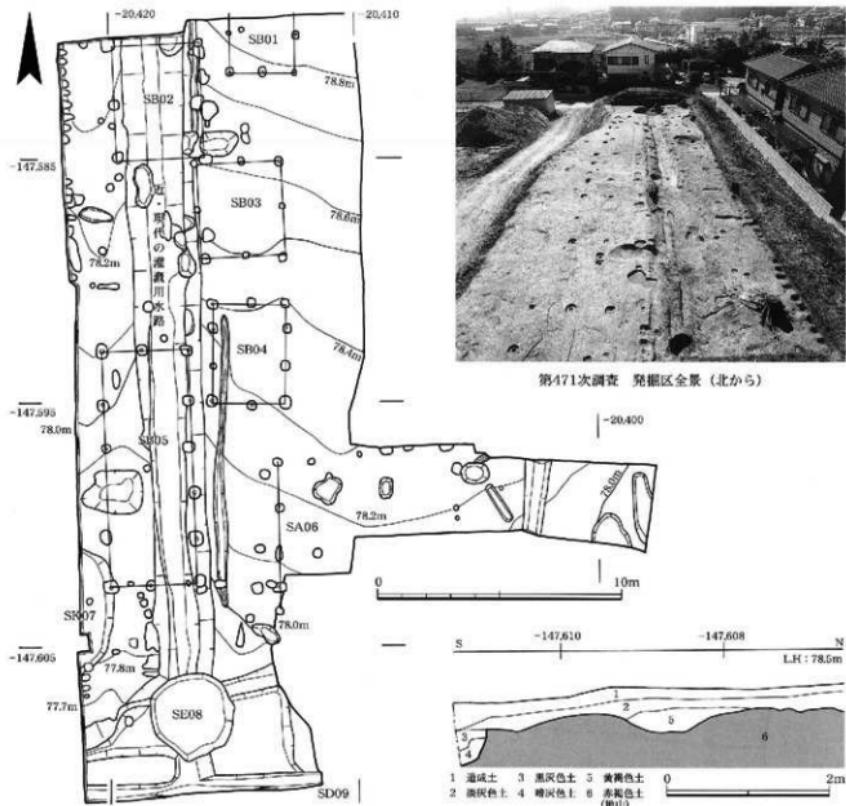
今回の調査では、奈良時代の掘立柱建物・井戸を確認した。丘陵上には、平城京の遺構が残っていることが判明した。  
(秋山成人)



井戸SE08（南から）



第471次調査 発掘区全景（北東から）

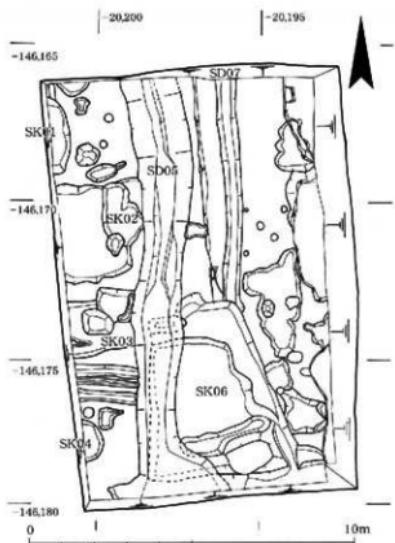


## 11. 平城京跡（西三坊大路）の調査 第463次

調査次数	HJ 第463次	調査期間	平成13年7月16日～8月3日
事業名	共同住宅建設	調査面積	112m <sup>2</sup>
届出者名	個人	調査担当者	秋山成人
調査地	普原町513-1		



第463次調査 発掘区位置図 1/6,000



第463次調査 道構平面図 1/150

調査地は、平城京条坊復原によると、喜光寺の西辺を画する西三坊大路の位置にあたる。したがって、大路の遺構の確認を目的に調査を行った。

まず、南北2箇所で試掘調査を実施し、土坑・溝が検出されたことにより、本調査を行うことになった。本調査の発掘区は、試掘調査の発掘区を広げた。

発掘区内の層序は、上から造成盛土、黒灰色土（耕土）、黄灰色土（床土）、茶褐色土と続き、地表下0.6mで、黄白色土の地山（無遺物層）に至る。また、発掘区の東半では、茶褐色土と黄白色土の間に上から黄褐色砂質土、淡灰色砂質土が堆積する。遺構の存する面は、黄白色土の地山と黄褐色砂質土上面で、標高76.74mである。

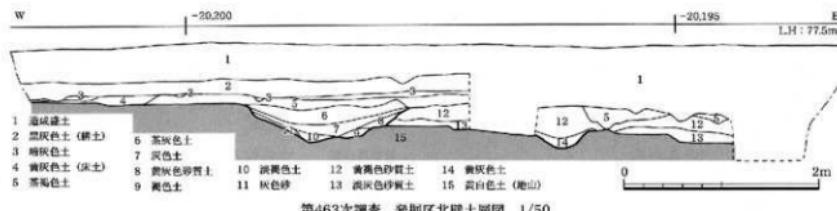
検出遺構には、鎌倉時代の土坑・溝、室町時代の土坑、江戸時代の溝、時期不明の土坑がある。

SK01は、発掘区北西隅で検出した土坑である。発掘区外西へ広がるため、平面形は不明である。東西0.57m以上、南北2.3m、深さ0.2m。底は平らで、埋土は、茶褐色土である。17世紀から18世紀の肥前系磁器染付楕、瓦質土器深鉢、丸・平瓦が出土した。

SK02は、発掘区西辺中央で検出した平面不整形掘形の土坑である。東西1.2m、南北2.3m、深さ0.14m。底は平らである。出土遺物はないが、埋土は、茶褐色土で、SK01と同様であることから同時期と考える。

SK03は、SK02の南側で検出した平面不整形掘形の土坑である。東西2.2m以上、南北2.0m、深さ0.14m。埋土は、茶褐色土で、瓦質土器、肥前産染付楕、丸・平瓦が出土した。

SK04は、発掘区南西隅で検出した平面円形掘形の土坑である。東西0.6m、南北1.3m、深さ0.4



m。掘形の断面は逆台形状である。埋土は、褐灰色砂質土で、鎌倉時代以降の瓦器、瓦質土器、土師器羽釜、丸・平瓦が出土した。

SD05は、蛇行しながら北から南へ延びる溝で、発掘区の南端で溝幅が広がる。幅1.7m～2.8m、深さ0.43m～0.5mで、長さ13m分を確認した。埋土は、上から茶灰色土、灰色土、黄灰色砂質土、褐色土、淡褐色土、灰色砂である。17世紀中頃～18世紀の土師器炮烙・皿、信楽産陶器甕、丸・平瓦、棟瓦が出土。重複関係から後述の室町時代の土坑SK06より新しい。

SK06は、発掘区南端で検出した平面不整形掘形の土坑である。東西4.7m、南北5.7m、深さ0.75m。埋土は、上から黒灰色粘質土、黒灰色砂質土である。8世紀の須恵器甕、15世紀以降の瓦器椀、瓦質土器深鉢・擂鉢、土師器皿が出土した。

SD07は、南北溝である。長さ7m、幅0.65m、深さ0.2m分を検出した。溝の北端は、発掘区外へ延び、南端は、SK06により壠されている。埋土は、淡灰色砂質土で、時期不明の土師器小片が少量出土した。溝心の国土座標値は、X=-146,167.00m、Y=-20,196.15mである。この溝は、上部が削平されたと考えられ、溝幅が狭く、深さが浅いが、西三坊大路西側溝の可能性がある。ただし、これまでに右京二条の西三坊大路の調査（国第151-17次調査 昭和58年度）と右京五条四坊三坪（国第100次調査 昭和51年度）の調査から求められた西側溝溝心からは東へ2.841mずれている。

このほかに発掘区の北東で、平面不整形掘形の土坑がある。埋土は褐色土で、土師器の小片が出土したもの、既存建物の基礎抜取により大半が壊され、詳しいことは不明である。（秋山成人）



第463次調査 発掘区全景（北西から）



第463次調査 発掘区全景（南から）

## 12. 平城京跡（右京六条四坊二・七坪）の調査 第474次

調査次数	HJ 第474次	調査期間	平成14年2月6日～2月22日
事業名	六条幼稚園舎建設事業	調査面積	250m <sup>2</sup>
届出者名	奈良市長	調査担当者	立石堅志・原田憲二郎
調査地	六条2丁目451-3、ほか		



第474次調査 発掘区位置図 1/6000

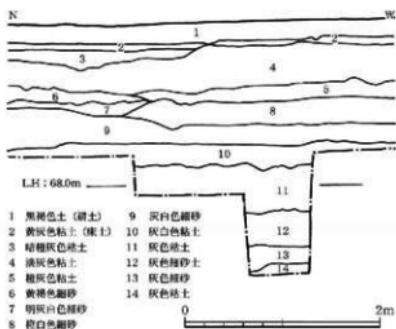
調査地は、西の京丘陵に複数ある谷の内で、もっとも規模の大きい谷の中央部にある。調査地周辺で、谷は最大幅になり東西160mにもなる。平城京寺坊復原では、右京六条四坊二・七坪にあたり、坪境小路が想定されているが、周辺の大型店舗建設に際しての試掘調査の成果から、遺構の存在する可能性は低いと考えていた。発掘区は、幼稚園建設用地の北寄りに、谷の地形を横断する方

向に東西42m、南北6mで設定した。

発掘区内の層序は、耕土以下、黄灰色粘土、暗橙灰色粘土、淡灰色粘土、橙灰色粘土と続く。地表下約0.8mまでのこれらの堆積土層上面では、水田耕作の痕跡が認められ、谷洪水による冠水の後に繰り返し水田構築が行われたものと考える。この堆積土以下、更に地表下約1.3mまでは、比較的水平な堆積が続き、黄褐色細砂、明灰白色細砂、橙灰白色細砂土、灰白色細砂土、灰白色粘土となる。灰白色粘土の下には、青灰色砂土、黄褐色砂、青灰色粘土などを互層とする堆積が続く。この互層堆積土層の上面に谷内流路の氾濫による大きな堆積の乱れが見られる。発掘区東部で地表から約3mまで掘り下げたが、灰色粘土と灰色砂が交互に続き、構造が存在する安定した地層はなかった。なお、これ以下の掘り下げに関しては、湧水が激しく危険であるため断念した。

結果として、奈良時代当初から当該谷内では、条坊の施行は行われていなかったと考えるのが妥当であろう。

（立石堅志）



第474次調査 発掘区東壁土層図 1/50



第474次調査 発掘区 全景（西から）

## II 平城京東市跡推定地の調査

平城京東市跡は、左京八条三坊五・六・十一・十二坪の4つの坪にまたがると推定されている。これまでに26件の発掘調査を実施してきた。

平成13年度の平城京東市跡推定地の発掘調査は、第27次から第29次までの3件である。

第29次調査は、毎年、継続して実施してきた重要遺跡確認調査で、平成12年度に引き続いて、左京八条三坊六坪で実施した。

第27次・第28次調査は、左京八条三坊十二坪とその西辺を通る東三坊坊間路の調査であり、これをまとめて報告する。

東三坊坊間路は、東市跡推定地の中央を南北に縦貫する道路で、平成13年度の3件の発掘調査は、いずれもこの道路際で、実施した。

本文中の遺構番号は、東市跡推定地内で付している通し番号である。



東市跡推定地の調査 発掘区位置図 1/6,000

## 1. 平城京東市跡推定地(左京八条三坊十二坪・東三坊坊間路)の調査 第27・28次

調査次数	TI 第27次・第28次	調査期間	第27次 平成13年10月23日～11月12日 第28次 平成13年11月12日～12月5日
事業名	第27次 個人住宅新築・第28次 吉丸屋住居防護整備事業	調査面積	第27次 83m <sup>2</sup> ・第28次 140m <sup>2</sup>
届出者名	第27次 個人・第28次 奈良市長	調査担当者	中島和彦
調査地	第27次 東九条町4345・第28次 同4341の一部		

## I. はじめに

東市跡と推定されている4つの坪の内、十二坪内の発掘調査は今回が初めてである。その西側を通る東三坊坊間路(SF027)は、北側の六・十三坪間に過去5回の調査があり、幅が溝心間距離で8.45mあり、東西両側溝とも奈良時代末から平安時代初頭頃に埋没することがわかっている。その両側には築地塀が想定され、数箇所で門が開く。また、鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・溝なども検出され、中世集落の存在が確認されている。

第27次調査は、十二坪の西端で坪の南北中央ラインのやや南側、第28次調査は、その西に隣接した東三坊坊間路上に発掘区を設定した。

## II. 層序

発掘区内の層序は、第28次発掘区北で、上から耕土(1)、灰色砂質土(2)、淡灰色砂質土(5)と続き、地表下約0.4mで明茶褐色土または明青灰色粘土の地山(無遺物層)となる。地山上面の標高は、第28次発掘区北で約56.3m、南で約56.4m、第27次発掘区で約56.4mである。

## III. 検出遺構

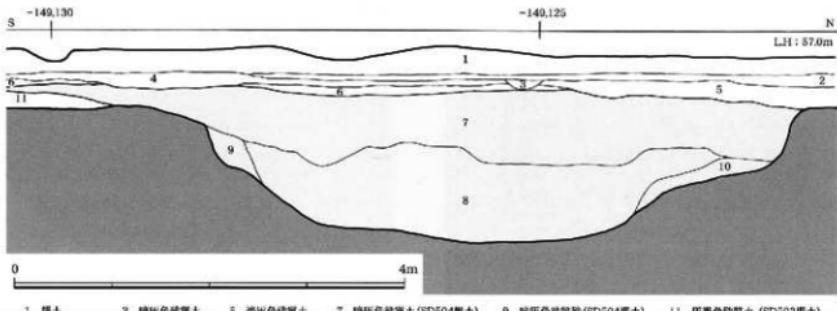
検出遺構には奈良・平安、鎌倉・室町時代の遺構がある。以下、各時期ごとに記す。

## A. 奈良・平安時代の遺構

東三坊坊間路と東側溝、掘立柱建物9棟、井戸1基、土坑7基がある。

SF027 [第28次] 東三坊坊間路で、SD031の西肩から約3m分を検出した。路面は地山のままで、発掘区南では路面上に後述する土坑が数基掘られる。

SD031 [第28次] 東三坊坊間路東側溝。幅1.0～1.3m、深さ0.1～0.6mある。中世の溝で一部破壊されているが、発掘区を縦断するように南北約35m分を検出した。主軸は、座標北に対して西にやや振れる。底は凸凹がはげしく、座標値X=-149,150mラインのやや北側では、南北約4.0mの範囲が一段崖み、土器、炭がまとまって出土した。護岸等の施設はなかった。出土土器から奈良時代末から平安時代初めに埋没する。溝心の座標値は、X=-149,144.00m、Y=-17,234.50mである。



第28次調査 発掘区西壁土層図 1/50

掘立柱建物・塀一覧表

遺構番号	建方向	規模 断行×奥間	断行全長(m)	奥間全長(m)	行柱間寸法(m)	奥間柱間寸法(m)	周の出(m)	備考
SB491	南北?	2間以上×2間以上	2.4以上	1.8以上	2.4-??	1.8-?		
SB492	南北?	2間以上×2間以上	1.8以上	3.0以上	1.82±ト?	1.5±5?		
SB493	南北?	3間以上×2間	4.2以上	4.2	2.1等間	2.1等間	2.4	東町付建物
SB494	東西?	3間以上×2間以上	4.2以上	1.8以上	2.1-2.1-?	1.8-?		
SB495	東西?	2間以上×1間以上	4.5以上	?	2.4-2.4-?	?		壁の可能性もあり
SB496	南北?	1間以上×2間?	?	3.6	?	1.8等間	2.4	西町付建物?
SB497	南北?	2間以上×2間以上	2.1以上	1.8以上	2.1?	1.8?		西町付建物?
SB498	南北?	2間以上×2間	2.4以上	4.5	2.4-?	2.25等間		西町付建物
SB499	東西?	3間以上×1間以上	4.95	?	1.65等間	?		井戸より新しい
SB500	南北?	2間以上×2間?	3.5以上	2.1以上	1.75-1.75-?	2.1-?		南住連携? 錦荷時代 唐舟時代の構造?と並行
SB501	南北?	7間以上	16.2以上	2.7等間				

SB491～499 [第27次] 掘立柱建物の分布は高密度で、重複関係から5回以上の建替えがある。いずれの建物も発掘区外につづき全体は不明だが、柱掘形の規模から中小規模の建物と推定される。柱穴からの出土遺物は少なく、時期を決定できるものはない。なお、SB491など、発掘区外西に続く建物の存在から、坊間路の東側に築地塀を想定することは難しいと言えよう。

SE502 [第27次] 方形縦板組横桟留の井戸で、井戸枠は内法一辺約0.8mある。枠は上から約1m分が腐食で失われている。深さ約2.6mまで掘削したが、底には到らなかった。縦板は、雑な作りで、大小さまざまな形の板が数枚重ねられているが、土圧により崩壊寸前であった。横桟の部分でわずか

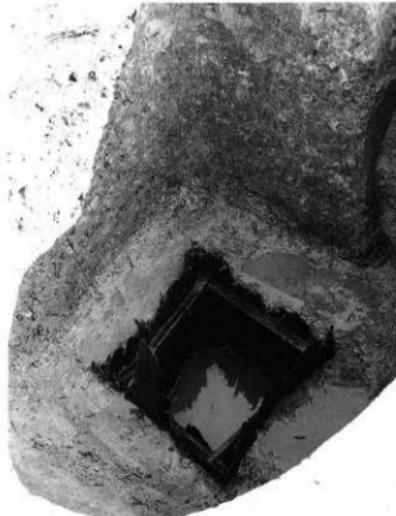
かに支えられ、板は折れ曲がり、井戸枠の断面形は算盤玉を連ねたようである。掘形は、平面方形で、南北約2.4m、東西2.1m以上ある。掘形の南側に重複して土坑を検出した。深さ約0.8mあり、井戸より古いが、詳細は不明である。枠内からは多数の遺物が出土し、土器、瓦、石製品、金属製品、錢貨、木簡、木製品、動物・植物遺存体等がある。出土土器から8世紀後半～末と考えられる。

SK507～510 [第27次] 十二坪内の土坑。いずれも平面梢円形で、深さ0.2～0.3mある。8世紀中頃から後半の土器・瓦が出土し、特にSK508・509からは土器がまとまって出土した。

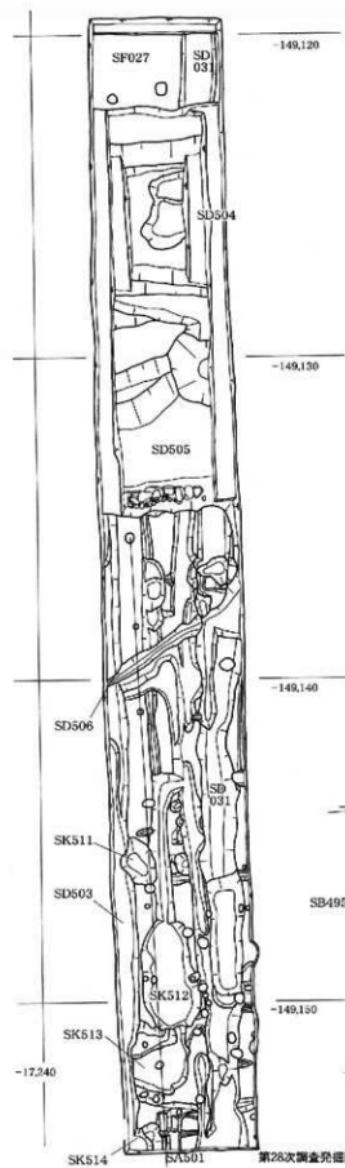
SK511～513 [第28次] 三坊坊間路路面上の土坑。SK511は、平面不整梢円形で、東西約1.7m、



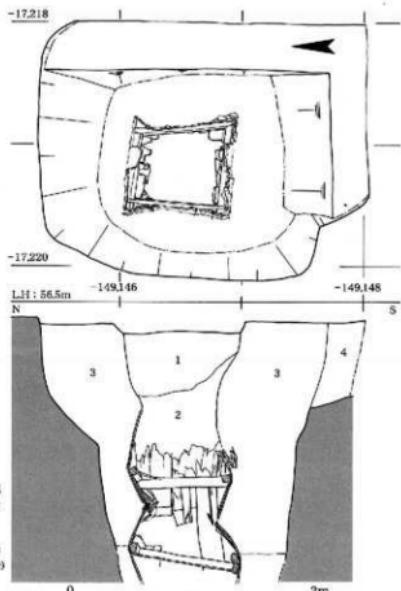
第27次調査 発掘区全景（東から）



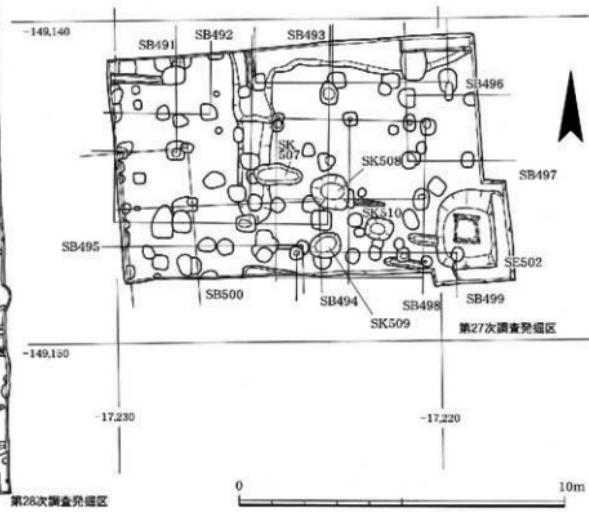
井戸SE502 全景（北西から）



第27・28次調査 進捗平面図 1/150



井戸 SE502 平面及び立・断面土層図 1/50



南北約3.3m、深さ約0.4m。8世紀末～9世紀初めの土器と瓦が出土した。SK512は、平面楕円形で、東西約1.7m、南北約3.3m、深さ約0.2m。8世紀末～9世紀初めの土器と瓦がまとめて出土した。SK513は、平面不整円形で、東西約1.7m、南北約3.3m、深さ0.1m。土器が少量出土した。

調査面積が小さく、建物群の変遷は不明だが、奈良・平安時代の遺構は大きく4時期に分れると言える。

1 坪内の土坑群（SK507～509）より古い時期。掘立柱建物SB494とSB498があり、重複関係からさらに2時期に分かれる。

2 坪内の土坑群の時期。土坑群との重複関係のない掘立柱建物群が想定されるが、どの建物かは不明。土坑出土土器から8世紀中頃から後半か。

3 井戸SE502の時期。同時期の掘立柱建物は特定出来ない。井戸は8世紀後半～末に廃棄される。

4 井戸SE502より新しい時期。西側の東三坊坊間路上に土坑が掘られ埋められる。また坊間路東側溝SD031にも土器が多量に廃棄される。8世

紀末～9世紀初めと考えられる。掘立柱建物にはSB499があるが、年代は不明。後述する鎌倉時代以降のものの可能性も考えられる。

#### B. 鎌倉・室町時代の遺構

掘立柱建物1棟、掘立柱塀1条、溝4条、土坑1基がある。

**SB500** [第27次] 発掘区の西端にある南北2間以上の建物。東西は第28次発掘区まで続かない2間と推定される。主軸が後述するSA501、SD503とそろい、これらと同時期のものと考えられる。

**SA501** [第28次] SD503に平行する南北方向の塀で、北端はSD505で破壊されており不明。

**SD503** [第28次] 第28次発掘区西端で検出した南北溝で、東肩から幅約0.8m分検出した。深さ約0.5m以上あり、断面形はU字形と考えられる。長さ約24m分を確認した。発掘区外南に続く。北端はSD505の北側で東に曲がるが、SD505に著しく破壊される。13世紀中頃から後半の土器が少量出土した。

**SD504** [第28次] 幅約6.5m、深さ約1.6mの東



第28次調査 発掘区全景（北から）



第28次調査 発掘区南半（北東から）

西溝である。両岸とも2段に掘られ、深さ約0.8mのところに平坦面がある。埋土は、上から暗灰色粘質土(87頁土層7)、暗灰色粘土(8)、暗灰色粘質砂(9)、灰色砂(10)で、暗灰色粘質土には植物遺存体が多く含まれる。暗灰色粘質土と暗灰色粘土は、後述するSD505とSD506にも同様に堆積しており、これら3つの溝は同じ時期に埋没している。いずれの溝からも肥前系の陶器が出土し、肥前系の磁器が出土していないことから、17世紀初頭に埋没したと考えられる。SD504からは他に木製品と瓦が少量出土した。

**SD505 [第28次]** 幅約3.5m、深さ約1.0mの東西溝で、発掘区東端で北に向かい、SD504に合流する。南岸には石組の護岸があるが、後述するSD506と合流する部分はない。石組は2段分、高さ約0.3mが残る。扁平な河原石を小口積し、裏込めに拳大の河原石を使用する。埋土は、上から暗灰色粘質土、暗茶褐色土、暗灰色粘質土で、暗茶褐色土から大量の中世の瓦が出土した。その堆積状況からみて、瓦は南側から廃棄されている。

瓦は完形を保ったものが多く、近くに瓦葺き建物が存在したと考えられる。他に土器、石製品が少量出土した。

**SD506 [第28次]** 幅約0.5m、深さ約0.3mの南北から北東に走る溝で、北東に向かって、幅、深さを増し、発掘区東端で北へ曲がり、SD505に合流する。土器、瓦が少量出土した。

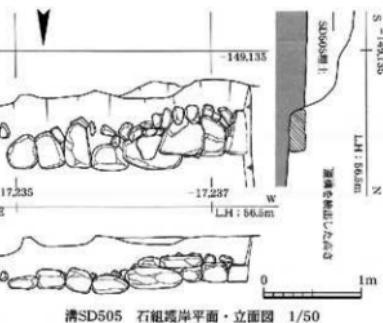
**SK514 [第28次]** 発掘区南西隅で検出した土坑。東西1.0m以上、南北1.0m以上、深さ約0.3mある。土器が破片数にして110点出土し、その内8割が土師器皿である。土師器皿には完形を保ったものもある。16世紀末～17世紀初めの時期と考えられる。

調査地は、鎌倉時代には、溝SD503と掘立柱塀SA501で西側と北側を区画した集落または屋敷地と考えられる。区画内には掘立柱建物SB500がある。区画は南北22m以上、東西14m以上ある。また、室町時代には、東西方向の堀状の溝SD504とSD505の南側に建物跡等が想定される。瓦の出土状況から、瓦葺き建物があったと考えられるが、その性格は不明である。

(中島和彦)



溝SD504 全景（北西から）



溝SD505 石組護岸（北東から）

#### IV. 出土遺物

第27次調査では遺物整理箱77箱分、第28次調査では63箱分が出土した。SE502、SD032、SK508・509などから、奈良・平安時代の遺物がまとめて出土した。また、第28次発掘区から多くの鎌倉・室町時代の遺物が出土した。SE502出土遺物と、SD504・505・506出土遺物を中心報告する。

##### A. 井戸SE502出土遺物

土器、土製品、瓦、石製品、金属製品（銭貨、他）、木製品（木簡、他）、動物・植物遺存体がある。奈良時代後半～末の良好な一括資料である。

##### a. 土器

土器には、土師器、須恵器、黒色上器、製塙土器があり、出土したそれぞれの器種ごとの破片数の内訳は別表（94頁）のとおりである。土器の出土量をみると、土師器が最も多く、全体のほぼ8割を占める。食器（杯・皿・碗・高杯）だけでも比べても、この比率は変わらない。土師器食器の中では碗Aが多いこと、また、黒色上器がまとまって出土していることは時期的な特徴を示していると思われる。これらのことや形態、調整手法などからみて、この土器群は奈良時代後半～奈良時代末頃のものと考えられよう。また、墨書き土器がまとめて出土しているのも特筆されることである。以下で、これらの上器について概述する。

**土師器** 杯A（3～10）・C（11～22・104・105）、杯蓋（1）、皿A（43～47）・E（48・49）、碗A（23～40）・C（41・42）・X、高杯（103）、鉢B・C、壺A・B・E、甕（55～59）、壺、瓶（60）がある。

杯Aは、口径により、AI（4～6・9・10）・AII（8）・AIII（3・7）に分けることができる。外面の調整は、底部は調整がなく、口縁部をヨコナデするa手法のものと、底部から口縁部をケズリで調整するc手法のものとがある。杯Cは、口径により、CI（12・15・16・22・104・105）・CII（13・14・17～21）・CIII（11）に分けることができる。外面の調整はa手法のものと底部外面をケズリで調整し、口縁部をヨコナデするb手法のものとがみられる。杯蓋は、頂部外面にミガキを

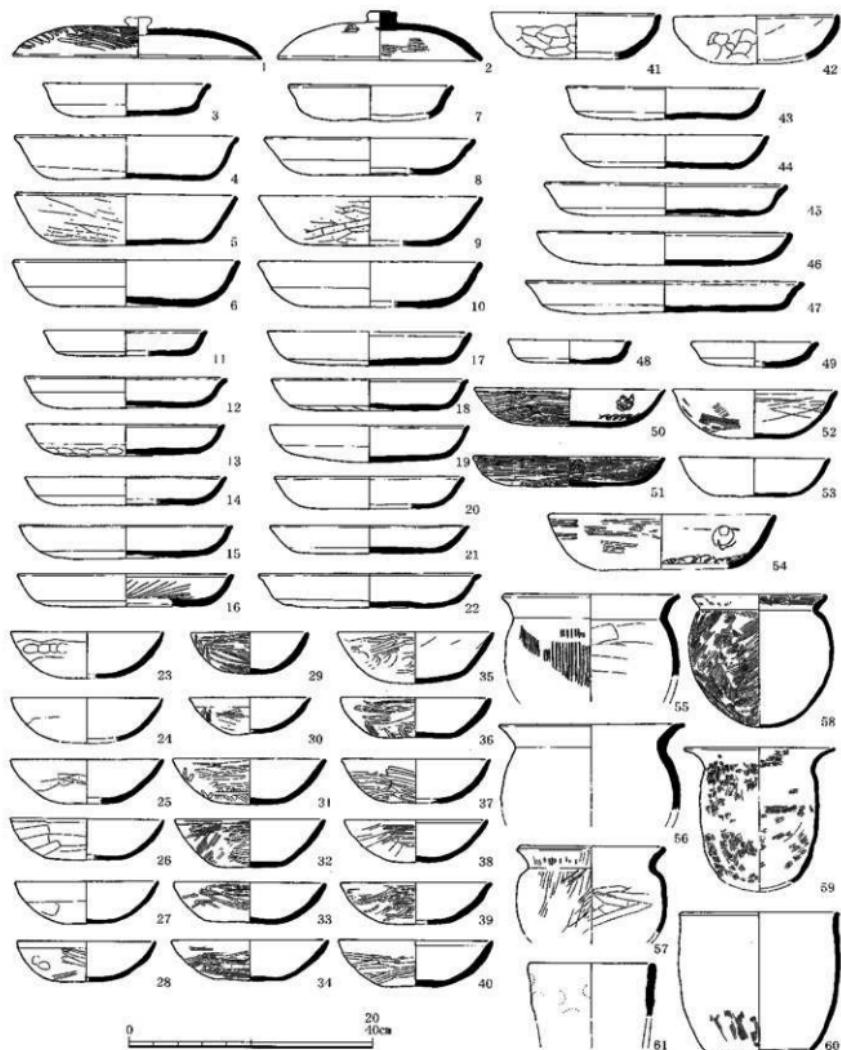
10回に分けて施している。皿Aは、口径によりAI（47）・AII（45・46）・AIII（43・44）に分けることができる。底部から口縁部が外反するものと（45・47）、内側するもの（43・44・46）とがある。図示したのはa手法とb手法のものだが、c手法のものもあり、口縁部内面に放射一段暗紋が施したものもある。口縁端部の形態には、内側に巻き込んだものと（45～47）、丸くおさめたものの（43・44）とがある。皿Eは、底部外面に指頭圧痕が残り、口縁部をヨコナデしている。いずれも口縁端部を外方へつまみだしている。碗Aは、外面の調整がa手法のものとc手法のものとがあり、更にミガキを加えるものが多くある。a手法にミガキを施したものが多い。27は、口縁部に煤が付着しており、灯明器として用いられたと思われる。碗Cは、外面の底部から口縁部下間に指頭圧痕が明瞭に残る。いずれも口縁端部が内傾している。甕は、59が長脚であるほかは、体部がほぼ球形である。内外面ともハケ調整のものが多いが、55の内面はナデ調整である。甕は、外面を粗いハケ調整している。黒斑がある。

**黒色土器** 杯（50・54）、杯蓋（2）、皿（51）、碗（52・53）、鉢がある。いずれも内面にのみ炭素を吸着させた黒色土器A類である。蓋は、外面の剥落が激しいが、内面には密にミガキを施す。杯・皿・碗は、外面をケズリ調整し、内外面ともミガキを施す。内面には螺旋暗紋がある。

**製塙土器**（61） 外面に指頭圧痕があり、内面は粗いナデ調整である。

**須恵器** 杯A（74・75・97・98）・B（80～89・95・96・99・100）、杯蓋（62～69・93・94）、皿A（76～79）・B（73）・C（70～72）、盤、鉢A（101）・D、壺A（同蓋）・E・L・M、甕がある。

杯Aは、いずれも口縁部をロクロナデ、底部外面を不定方向のナデにより調整している。底部外面はヘラキリの後、調整しないものとロクロケズリをするものとがある。杯Bは、口径により、BI（80・81・96・98）・BII（82・83・86～89・95・99）・BIII（84・85）に分けることができる。いずれも口縁部をロクロナデ、底部内面を不定方



井戸SE502出土土器（上輪窓・黒色土器） 1/4 (58~60は1/8)

向のナデにより調整している。底部外面はヘラキリの後、調整しないものとロクロケズリをするものがある。蓋は、いずれも縁部を屈曲させる形態のものである。これらの中には、口径が同程度でも器高の低いものと高いものがある。頂部外面の調整をみると、ヘラキリの後、調整しないものとロクロナデをしているものがある。頂部内外面に重ね焼きの痕跡があるものもある。皿Aは、口径により、AI（77・79）・AII（76・77）に分けることができる。いずれも口縁部をロクロナデ、底部内面を不定方向のナデにより調整している。底部外面はヘラキリの後、調整しないものとロクロケズリをするものがある。口縁部に重ね焼きの痕跡があるものがある。78の内外面には火ダスキがある。皿Bは、細くてやや高めの高台が付されている。底部外面をロクロケズリしている。灰白色で硬質に焼き上がっており、他の多くの須恵器と産地を異にしていると思われる。皿Cは、口径により、CI（72）・CII（70・71）に分けることができる。口縁部に重ね焼きの痕跡があるものもある。

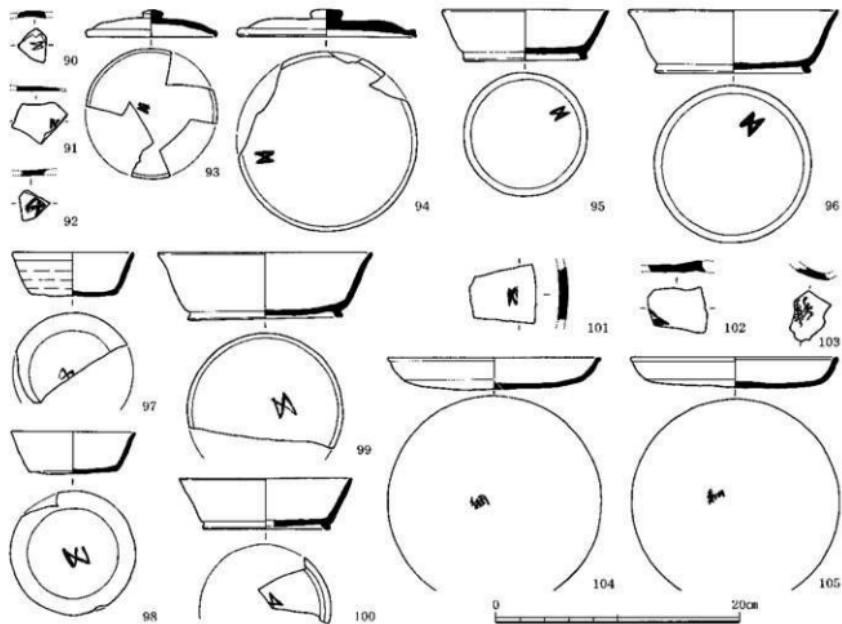
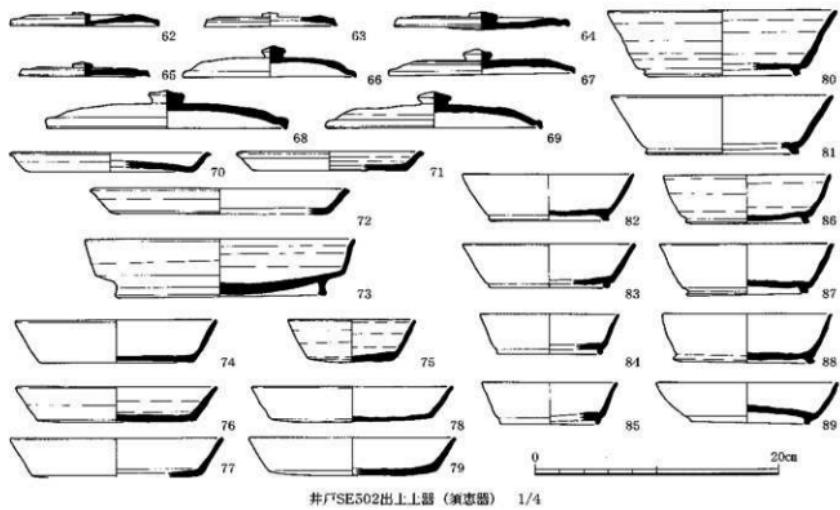
**墨書き土器**（90～102） 「△」と記された土器が13点出土している。器種別にみれば、土師器の杯もしくは皿（90～92・102）、須恵器の杯A（97・98）・B（95・96・99・100）、杯蓋（93・94）、鉢（101）がある。蓋は頂部内面の、杯・皿は底部外面の、正位置では見えない部分に墨書きがある。いずれも一筆書きである。「種」（103）は高杯の脚部内面に、「飼」（104・105）はいずれも土師器杯Cの底部外面に墨書きがある。

なお、六坪で実施したTI第12次調査（市東市概報X）の井戸SE200から「飼」の墨書き土器が2点出土しており、うち1点は土師器杯Cである。坪は異なるが、同じ文字が出土していることは興味深い。また、第12次調査では「小」のような文字もしくは記号を墨書した上器が19点以上出土しており、同じ文字・記号がある上器がひとつの井戸から多數出土していることも共通点している。この2つの井戸はほぼ同時期であり、両井戸及び出土した土器群の関係は興味深い。

（池田裕英）

井戸SE502出土土器の器種構成表

種類	器 形	器 標	出土点数	出土率 (%)	
須恵器	皿		135	4.3	
	杯・盤	杯A	29	0.9	
		杯B	50	1.6	
		杯?	1	0.03	
		皿A	24	0.8	
		皿B	4	0.1	
		皿C	16	0.5	
		杯・盤	237	7.5	
		小計	361	11.4	
		鉢		11	0.3
土師器	鉢A	5	0.2		
		鉢D	4	0.1	
		鉢	3	0.1	
		小計	12	0.4	
		碗		1	0.03
		碗A蓋	1	0.03	
		蓋E	1	0.03	
		蓋L	5	0.3	
		蓋M	2	0.1	
		長持瓶	9	0.3	
	皿	48	1.5		
	小計	70	2.3		
鉢小皿	鉢小皿		11	2.3	
		皿		76	2.4
		小計	167	21.4	
	土師器	杯・皿・鉢	杯A	28	0.9
			杯C	113	3.6
			皿A	126	4.0
			皿C	29	0.9
			鉢A	164	5.2
			鉢C	15	0.5
			蓋N	1	0.03
		杯・皿・鉢	1181	37.5	
		小計	1667	52.6	
		蓋		10	0.3
高杯	高杯		34	1.1	
		鉢B	9	0.3	
		鉢C	6	0.2	
		小計	45	0.5	
		碗A	1	0.03	
		碗B	41	1.3	
		蓋E	4	0.1	
		小計	46	1.1	
		鉢		630	20.0
		皿		11	0.3
墨書き土器	蓋		5	0.2	
		不明		23	0.7
		小計	2431	6.7	
	黒色土器	杯・皿・鉢	杯	11	0.3
			皿	7	0.2
			鉢	7	0.2
			杯か	12	0.4
			蓋	8	0.3
			鉢	1	0.03
			小計	46	1.4
		合計		3153	99.9
		土馬		3	
		蓋馬・蓋		701	



**b. 石製品**

砥石が3点ある。

**砥石** (106~107) いずれも形状は方柱状である。106は、両端を欠損しており、長さ3.9cm以上、幅4.5cm、厚さ2.1cmである。灰白色の流紋岩製である。107も一端を欠損し、長さ7.8cm以上、幅4.0cm、厚さ3.6cmである。やや緑味をおびた灰白色の流紋岩製である。108は完存しており、長さ16.5cm、幅4.5cm、厚さ3.8cmである。やや緑味をおびた灰白色の流紋岩製である。いずれも側面は平滑で、四面をすべて使用している。106の側面には半円形に抉れた箇所があり、この部分もまた平滑である。

**c. 金属製品**

刀子1点、釘1点、銅錢3点がある。

**刀子** (109) 刃部の破片で、両端を欠損している。残存長8.8cmである。鋸に厚く覆われ、詳細は不明である。

**銅錢** (110~112) 和同開珎1点、神功開寶2点がある。110は径25.13mm、111は径24.22mm、112は径24.69mmである。

**d. 木製品**

木簡5点、横櫛3点、簀串2点、箸57点、横斧1点、曲物1点、挽物皿1点、堅杵1点、折敷1点、用途不明製品などがある。

**木簡** 1点は断片で、厚さ1mm、幅11mm以上、長さ72mm以上ある。それ以外の4点は削屑で、長さ32~125mmである。いずれも文字は判読できない。

**横櫛** (113~115) すべて欠損があり、全体形が判明するものはない。幅がわかるものは114のみで、幅5.3cm、厚さ0.5cmある。齒数は48本で、齒の密度は3cmあたり30本である。113は厚さ0.5cm、齒の密度は3cmあたり42本、115は厚さ0.45cm、齒の密度は3cmあたり30本である。棟はいずれも丸く作られるが、115はやや尖り気味である。いずれも表面は平滑に研磨される。

**簀串** (116, 117) 116が幅3.4cm、長さ18.2cm以上、厚さ0.18cm、117が幅3.3cm、長さ19.5cm以上、厚さ0.1cmである。116は上端を主頭状にし、左右の側面に1箇所ずつ切り込みを入れる。116は

下半部を、117は上半部を欠損するが、いずれも欠損部が焦げている。

**箸** (119~121) 両端が残るものは121の1点だけで、全長23.8cmある。断面は円形で、基部と先端の区別はない。

**横斧** (122) 木柄に鉄斧を装着したもの。木柄は、斧頭を装着する斧台と握りが一体のもの。袋状鉄斧を斧台に挿入する。握りは他に数点の破片があるが接合せず、全長は不明である。斧台は長さ17.8cmで、鉄斧の先端までは24.0cmある。鉄斧との装着部で折れており、紐掛等の仕様は明瞭でない。袋状鉄斧は、長さ10.8cm、刃部幅5.3cm。袋部の断面は橢円形で、基部で長径3.8cm、短径2.6cmある。

**曲物** (123) 平面円形の底板で、径16.0cm、厚さ0.5cmある。中央に長辺1.2cm、短辺0.7cmの長方形の穿孔がある。側面には4箇所の釘痕が残る。

**挽物皿** (124) 積高台。口径23.6cm、器高1.3cmである。腐蝕のため内外面の調整は不明。底部にロクロの爪痕が3箇所残る。横木取りである。

**堅杵** (125) 完存する。全長47.9cm。撫部の径は両端とも5.5cm。握部から両端までの長さが異なり、短い方の撫部の先端は丸い。使用による磨耗のためと思われる。削材で作られている。

**折敷** (126) 底板の一部。約半分を欠損しているが、平面隅丸長方形になると考えられる。長さ57.3cm、幅13.7cm以上、厚さ0.7cmある。檻皮で側板を結合した痕が3箇所ある。井戸枠の部材として利用されていた。

**用途不明木製品** (118) 直径3.0cm、厚さ0.7cmの円板の中央に径0.5cmの円孔を開ける。

**e. 動物・植物遺存体**

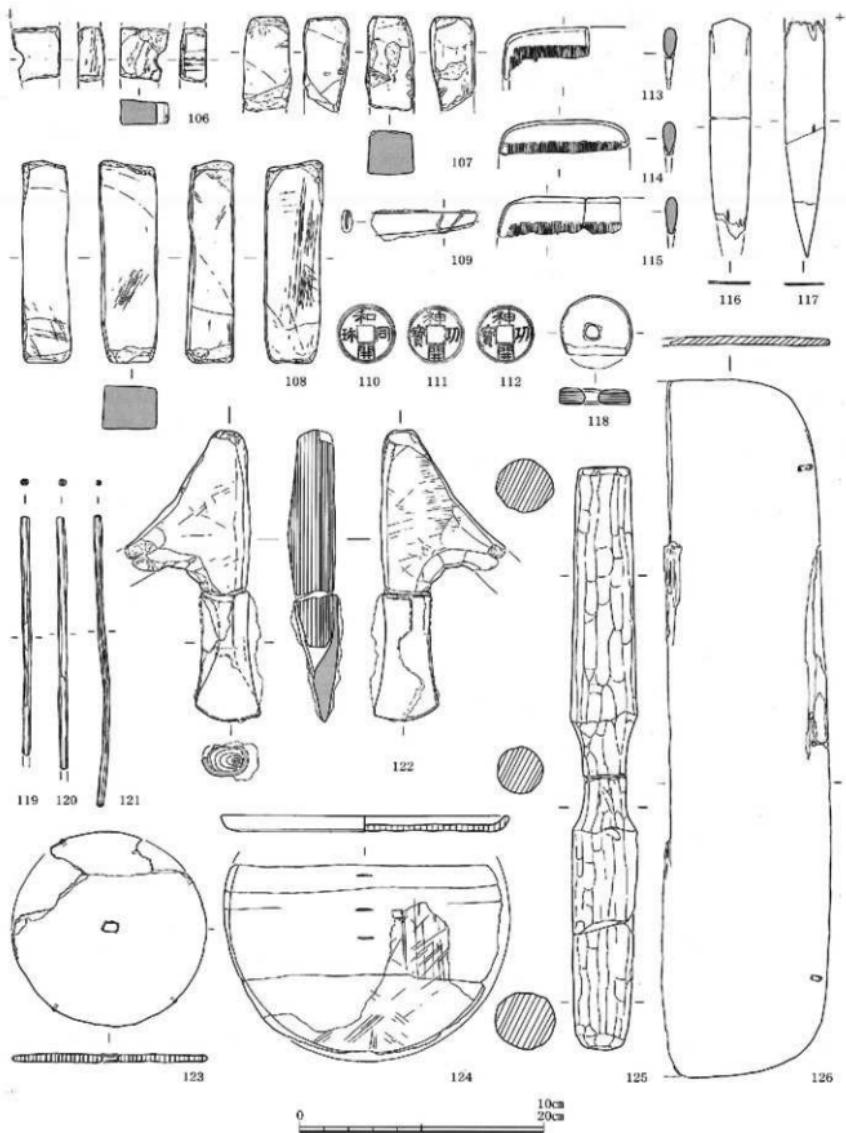
動物遺存体には哺乳類（ドブネズミまたはクマネズミ、イノシシ）、魚類（サケ、ボラ）がある。サケの出土は西日本では珍しい。植物遺存体にはモモの核、ウラジロ、ヒョウタン等がある<sup>1)</sup>。

**f. 瓦**

出土量は少なく、丸瓦13点（1.760kg）、平瓦6点（0.840kg）、不明の瓦7点（0.045kg）がある。

(中島和彦)

1) 動物遺存体の鑑定は、奈良文化財研究所 松井章氏による。



井戸SE502出土石製品・木製品・金属製品 1/4 (110~112, 118は1/2)

## B. SD504・505・506出土遺物

瓦、土器、石製品、木製品がある。出土土器から、17世紀初頭頃に廃棄されたものと考えられる。

## a. 瓦

軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、雁振瓦、面戸瓦、磚がある。大半がSD505からの出土した。

軒丸瓦は8点あり、SD505から6点、SD506から1点、その他の遺構から1点出土した。軒平瓦は18点あり、SD505から11点、SD504から3点、遺物包含層から4点出土した。軒丸瓦、軒平瓦とも、SD505から出土した平安時代以降のものが大半を占めており、奈良時代の軒丸瓦は、遺物包含層出土の6281型式種不明とSD505出土の型式不明が各1点、奈良時代の軒平瓦は、SD505出土の6712型式A種が1点のみである。

130は、蓮華紋軒丸瓦で、中房が凹む。内区が部分的に残り、複弁8弁で、蓮子が中央1、その周りに6のものに復元できる。平安時代のものと考える。SD505から出土した。

129は、複弁蓮華紋軒丸瓦で、内・外区が部分的に残るが、中房は欠損する。内・外区間に凸圓線が回る。外区は直立縁で、平安時代後期のものと考える。SD505から出土した。

128は、左巻き三巴紋軒丸瓦である。巴は、尾が圓線状に回り、断面が台形である。頭の形状は、欠損のため、はっきりしない。瓦当面に糸切痕がある。珠紋数は17に復元できる。瓦当裏面は丁寧にヨコナデする。瓦当径約14.3cm、全長約36.0cm、玉縁長約5.8cmである。玉縁の凹面側縁部を面取りしている。胴部と玉縁部に各1つ釘穴があり、玉縁部のものは焼成前に穿孔されている。鎌倉時代前期のものと考える。SD505から出土した。

127は、左巻き三巴紋軒丸瓦で、珠紋22、瓦当径約15.5cmである。胸部凹面に吊り紐の痕がある。吊り紐の特徴から、室町時代時代のものと考える。SD505から出土した。

131は、左巻き巴紋軒丸瓦の断片で、SD506から出土した。

132は、右巻き巴紋軒丸瓦の断片で、SD505から出土した。瓦当面に離れ砂が付着する。

135は、4回反転均整唐草紋軒平瓦である。中心

飾り左端から左半分が残る。長さ約3.7cmの額貼り付け曲線額である。平瓦部凸面の額寄りに幅2~3cm単位のタテケズリ痕がある。額の側縁部に凹型台の圧痕がある。遺物包含層から出土した。

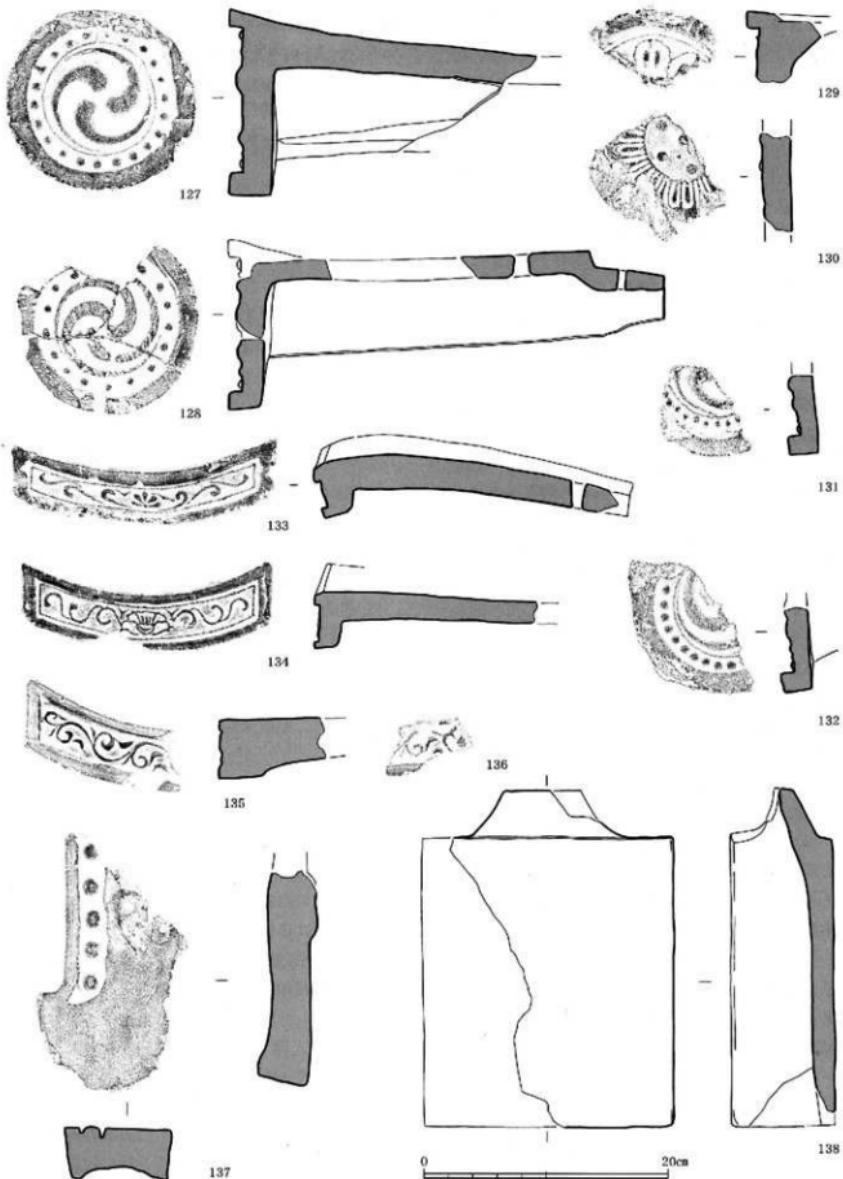
136は、135と同范の中心飾り部分の断片で、額の粘土が剥離した粘土板凸面に糸切り痕がある。上外区・下外区は、厚さ1cm程度の粘土板で成形している。遺物包含層から出土した。額部分に凹型台の圧痕があることから、135・136とともに13世紀初頭以降のものと考える。

133・134は、半截花紋軒平瓦である。133は、独立した唐草が中心飾りの左右に3回反転する。瓦当面の右上外区から脇区にかけて範傷があり、瓦当面に離れ砂が付着する。瓦当貼り付け段額である。134は、連続する唐草が中心飾りの左右に3回反転する。133に比べると瓦当幅はやや小さい。ともに瓦当上縁を0.8cm程度の幅で面取り、平瓦部凸面の額寄りに、幅2~3cm単位のタテケズリ痕がある。額裏面をヨコナデ、額後縁を0.4cm程度の幅で面取りする。これらの特徴から、14~15世紀初頭のものと考える。ともにSD505から出土した。なお、133の同范品が7点出土しており、1点がSD504出土で、その他はSD505からの出土である。

137は鬼瓦で、牙部分の断片である。形状から、大棟用を考える。SD505から出土した。また、同范品と考えられるものが、SD505からもう1点出土している。室町時代のものと考える。

138は雁振瓦である。全長約28cm、玉縁長約4cm、幅約20cm、高さ約9cmで、横断面は反りが弱く、「く」の字状である。前端凹面側のケズリも浅い。玉縁凹面端縁と、後端から玉縁の凹面側も面取りする。SD505から出土した。雁振瓦は他に10点（隅が残るもの7点）出土しており、形状・調整は138と同様である。SD505から8点、SD504と遺物包含層から各1点出土した。

139は丸瓦、140は平瓦で、ともにSD505から出土した。139は全長約29cm、玉縁長約5cm、径約14cmである。凹面側縁を胴部から玉縁にかけて、1.5~2.5cmの幅で面取りする。広端縁のケズリは幅3.5cm程度である。また、玉縁部凹面側縁の面取りは幅0.3cm前後、凹面端縁のケズリは幅0.8~2.0



溝SD505、ほか出土瓦 1/4

cmである。凸面はタテナデする。同法量・技法の丸瓦は、他に8点ある。140は、全長約25.5cm、広端幅約19.8cm、狭端幅約18cmである。凹面は布目の大半が摩り消され、狭端縁を0.8cmの幅で面取りする。凸面はタテナデで仕上げる。同法量・技法の平瓦は、他に7点ある。なお、先述の軒平瓦133・134の平瓦部とほぼ同法量である。139・140はともに室町時代のものと考える。

ほかに、面戸瓦と磚がSD505から各1点出土した。面戸瓦は、いわゆる蟹面戸で、上辺約9.5cm、下辺は欠損する。焼成前に凹面側から深さ0.3～1.0cmの分割截線を入れ、焼成後に分割する。磚は3辺とも完存しない断片であるが、厚さは6.5cm以上ある。

道具瓦を除く出土瓦の破片点数と重量を表に示した。丸瓦、平瓦の時代区分に関して説明すると、丸瓦は、丁寧なタテナデで、凸面の繩タタキメが消されるものを室町時代のものとした。平瓦は、凸面に繩タタキメを残すものを古代、斜格子タタキメを残すものを鎌倉時代、タテナデで繩タタキメが消されるものを室町時代のものとして大別した。また、形状に起因して、丸瓦には軒丸瓦（丸瓦部）や面戸瓦の断片が、平瓦には軒平瓦（平瓦部）、熨斗瓦、雁振瓦の断片がある程度含まれるものと考える。また、その他の遺構から出土したものの分類については、SD504・505からの出土品と比較して、残存状況が悪いことを考慮し、時代別の分類を行わなかった。

つづいて、総出土数量の80%近くを占めたSD505出土瓦の様相を記す。丸瓦139・平瓦140と同法量の完存する丸瓦（9点）・平瓦（8点）の平均重量が、丸瓦・平瓦ともに1,630g前後であった。平瓦140と同法量の平瓦で確認できた瓦の葺き重ねの痕から、半分を重ねて葺いており、結果として、丸瓦139と同法量の丸瓦1枚に対し、平瓦2枚の割合で葺かれることも判明した。ところが、SD505から出土した平瓦の総重量は、丸瓦の約4倍に及び、想定した2倍の重量に当たる。

瓦が廃棄された背景、使用建物数、屋根形状などは不明であるが、軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦はもとより、丸瓦も、平瓦に比べると再利用のためか、

相当な量がSD505に廃棄されなかった可能性が高い。出土した軒平瓦133・134の型式の年代観より、出土陶器の型式から導かれるSD505の廃絶時期が200年くらいも新しいことに、その理由の一端があるのかもしれない。（宮崎正裕）

#### b. 土器

SD505からは、破片数で436点出土しており、その内訳は、土師器112点（25.7%）、瓦質土器286点（65.6%）、国産陶器35点（8.0%）、輸入陶磁器3点（0.7%）である。また、SD504からは23点、SD506からは27点が出土している。いずれもこのほかに奈良～鎌倉時代の土器が少量ある。土師器18点（141～158）、瓦質土器10点（168～177）、国産陶器5点（162～166）、輸入陶磁器1点（167）を図示した。163がSD504出土、150・152がSD506出土で、その他がSD505出土である。土師器皿は、大きく3類に分けられる。

① ハソ皿の形態を残すもの（141～143）。

② 平底で、底部と口縁部の境が屈曲し、その境が明瞭なもの（144～149、151、154）。

③ 器壁がやや厚手で、底部から緩やかな弧を描きながら口縁部になり、その境が不明瞭なもの（150、152、153）である。

これらのうち、③が最も新しい型式の土師器皿と考えられ、肥前窯系の磁器と共に伴する例が知られる。

158の土師器羽釜は直立した口縁部に鰐が付くもので類例は少ない。

174の瓦質土器擂鉢は、内面に1本単位の擂り目があり、丹波窯の擂鉢の模倣と考えられる。168の方形浅鉢の口縁部と脚部は同一個体と考えられるが、接合はしない。

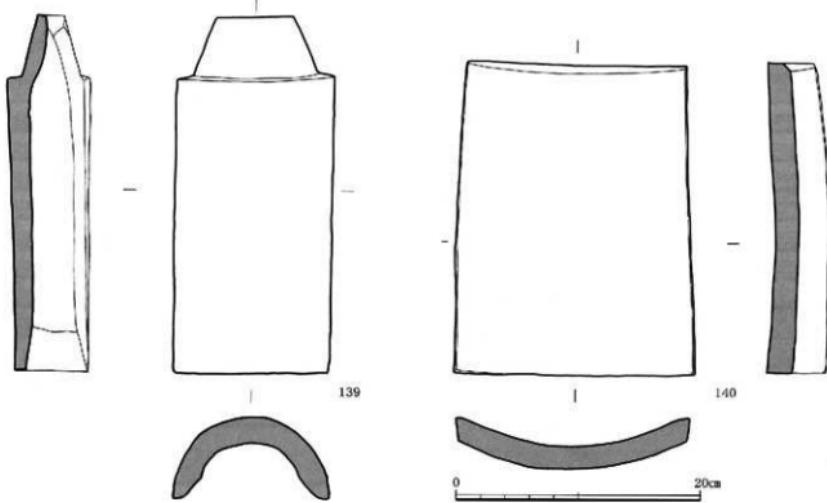
162～164は肥前窯で、162の楕は砂目積、164の皿は胎土目積で、内面に鉄絵がある。165は備前窯の擂鉢、166は瀬戸美濃窯の楕で、内外面に鉄釉を施す。167は青花の皿で、骨付のみ露胎である。他に青磁碗がある。

#### c. 石製品 砥石と右鍋がある。

砥石（159） 幅5.6cm、厚さ2.0cmの板状のもので、一端を欠損するが、もう一端には両側から円孔が穿たれる。表裏ともに使用により平滑であ

遺構別・時代別の瓦の破片数と重量表

遺構名	時代	軒丸瓦		軒平瓦		丸瓦		平瓦		丸・平瓦		合計	
		点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
SD505	古代	3	900	1	140	31	5,320	59	7,360	0	0	94	13,720
	中世 鎌倉時代	1	2,080	0	0	0	0	36	8,650	0	0	37	10,730
	室町時代	2	2,870	9	10,550	293	61,950	1,507	245,540	18	1,230	1,829	322,140
SD504	古代	0	0	1	240	4	550	14	2,300	0	0	19	3,090
	中世 鎌倉時代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	室町時代	0	0	3	930	15	3,110	51	9,090	1	180	70	13,310
その他		2	230	4	1,290	97	11,380	292	31,020	51	870	446	44,790
合 計		8	6,080	18	13,150	440	82,310	1,959	303,960	70	2,280	2,495	40,7780



溝SD505出土丸瓦・平瓦 1/4

るが、円孔周辺から端部にかけては摩滅が少ない。

青灰色の黒色片岩製である。

石鍋（161） 滑石製で、外面に鉤がめぐる。

13世紀頃の製品と考えられる。

#### d 木製品

160は、用途不明製品。長さ11.6cm。断面は梢

円形。形態は包丁の柄に似ており、一端には茎を差し込むような深さ2.1cmの穴があるが、茎を差し込むには浅いように思われる。

（中島和彦）

#### V. まとめ

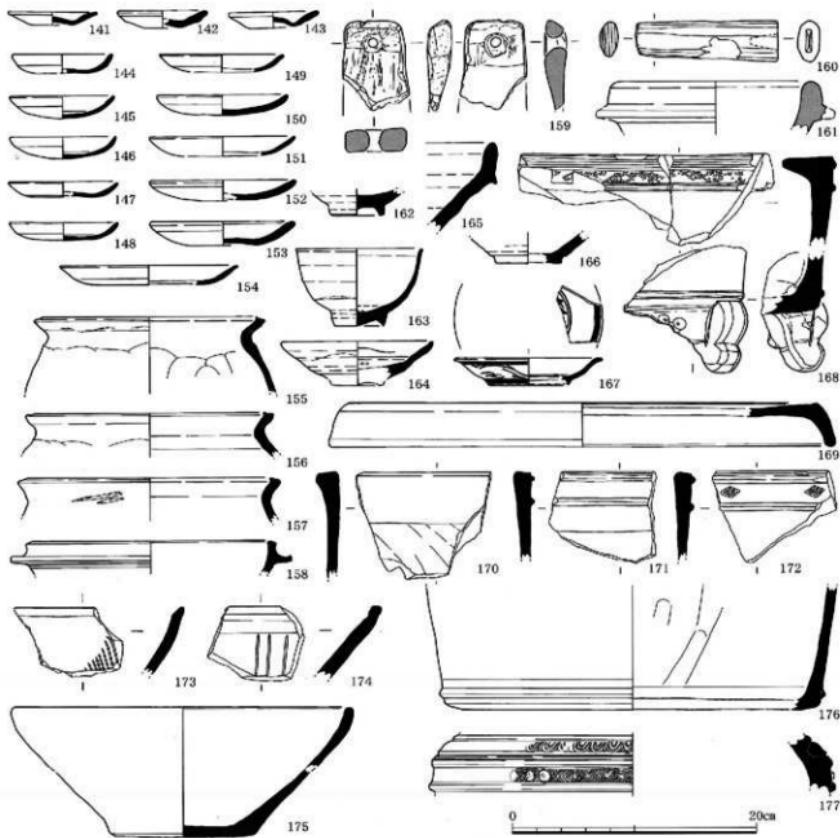
東市跡推定地の4つの坪のうち、今回が十二坪の初めての調査で、その西端の一部を発掘した。

調査の結果、以下の点が指摘できよう。

① 十二坪内においても、奈良時代後半を中心とした遺構が存在している。

これらの遺構の内、六坪と同じ内容をもつ墨書き土器が出土する井戸があり、両坪の関係を考え上で興味深い。

五・十二坪を南北に分断する東三坊坊間路を確



溝SD504・505・506出土土器、木製品、石製品 1/4

認した。坊間路は平安時代前半頃には埋没する。十二坪の西面には、築地屏による閉塞施設は確認できなかった。

② 十二坪内にはさらに鎌倉・室町時代の遺構が存在する。

今回検出した遺構は、いずれも集落・屋敷等を区画する溝のみで、その詳細は不明である。室町時代の溝からは大量の瓦が出土しており、瓦葺き建物の存在を想定できる。鎌倉・室町時代の瓦が使用されており、建物の年代をおおよそ推定できよう。

『大乘院寺社雜事記』には、辰市郷にあった東西2つの尼寺が記されている。西の寺は、「辰市西寺正豐寺」(長享元年(1487年)十二月)で、杏郷にあったことがその他の文献から確認されている。東の寺は「新福寺号東之寺同辰市ニ在之」(応仁二年(1468年)閏十月)とあるのみで、詳細は不明である。

今回出土の瓦が、この新福寺に関わるものかは明らかでないが、杏郷の東に位置し、文献に記された年代と同時期であるという点は指摘できよう。

(中島和彦)

## 2. 平城京東市跡推定地（左京八条三坊六坪）の調査 第29次

調査次数	TI 第29次	調査期間	平成14年1月7日～3月6日
事業名	範囲確認調柶	調査面積	425m <sup>2</sup>
届出者名	一	調査担当者	秋山成人
調査地	杏町588-1		

## I. はじめに

調柶地は、六坪の南東隅に位置し、八条々間南小路に面する。東に隣接して、TI25次調柶（平成11年度）発掘区がある。

発掘区内の層序は、上から黒灰色土（耕土）、

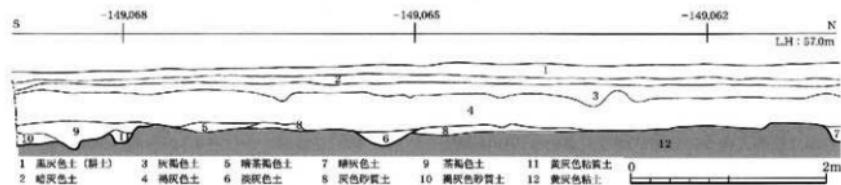
暗灰色土、灰褐色土、褐灰色土、黄灰色粘土の地山（無遺物層）となる。地山上面の標高は、発掘区北東隅で56.3m、南西隅で56.1mである。

## II. 検出遺構

八条々間南小路北側溝、奈良・平安時代の掘立



第29次調柶 発掘区全景（南から）



第29次調柶 発掘区西壁土層図 1/50



第29次調査 発掘区南西部（東から）



第29次調査 発掘区南東部（西から）



井戸SE520 断面（南から）



井戸SE526 断面（西から）

柱建物、掘立柱塀、井戸、鎌倉時代の掘立柱建物、溝がある。

#### A. 奈良・平安時代の遺構

SB515 発掘区北西で検出した桁行3間（5.6m）、梁間2間（6.6m）の南北棟建物である。柱間寸法は、桁行が北から1.5、1.8、2.3m、梁間が1.8m等間である。

SB516 発掘区北西で検出した桁行2間（4.05m）以上、梁間1間（3.3m）の東西棟建物である。柱間寸法は、桁行が東から2.1、1.95m、梁間が3.3mである。柱穴から8世紀の土師器、須恵器が出土した。重複関係からみてSB515より新しい。

SB517 発掘区西半で検出した桁行3間（6.3m）、梁間2間（3.9m）の東西棟建物である。柱間寸法は、桁行2.1m等間、梁間1.95mである。

柱穴から8世紀の須恵器が出土した。

SA519 発掘区南西で検出した南北3間（4.5m）の掘立柱列である。柱間寸法は、北から1.8m、等間である。柱掘形は、不整形な形をしており、大きさも不揃いである。柱穴から8世紀末の土師器、

須恵器が出土した。

SE520 発掘区の南西で検出した平面不整形掘形の井戸である。掘形は東西2.4m、南北2.5m、深さ2.18mである。枠は、上部が縦板組1段分（約0.6m）残り、下部が井籠組で、七段分（約1.15m）残る。内法約0.45mである。枠内から8世紀末から9世紀初めにかけての土師器（椀・皿・甕）、須恵器（杯・杯蓋・壺・甕・ミニチュア壺）、製塙土器、土馬、刀子の柄、斎串、桃の種、軒丸瓦（型式不明）、丸・平瓦が出土した。

SB521 発掘区の中央で検出した桁行4間（7.2m）、梁間2間（3.6m）の東廂付南北棟建物である。柱間寸法は、桁行梁間とも1.8m等間、廂の出が2.4mである。柱穴から8世紀の土師器、須恵器、製塙土器が出土した。

SB522 発掘区の中央で検出した桁行4間（8.4m）、梁間2間（3.6m）の東廂付南北棟建物である。柱間寸法は、桁行が2.1m等間、梁間が1.8m等間、廂の出1.5mである。重複関係からみてSB521より新しい。

**SA523** SB521の東側1.5mで検出した南北5間の掘立柱列である。柱間寸法は、北から1.8、1.8、2.1、2.1、2.1mである。柱穴から8世紀の土師器、須恵器が出土した。SB521の桁行と並行していることから、同時期の掘立柱構と考えられる。

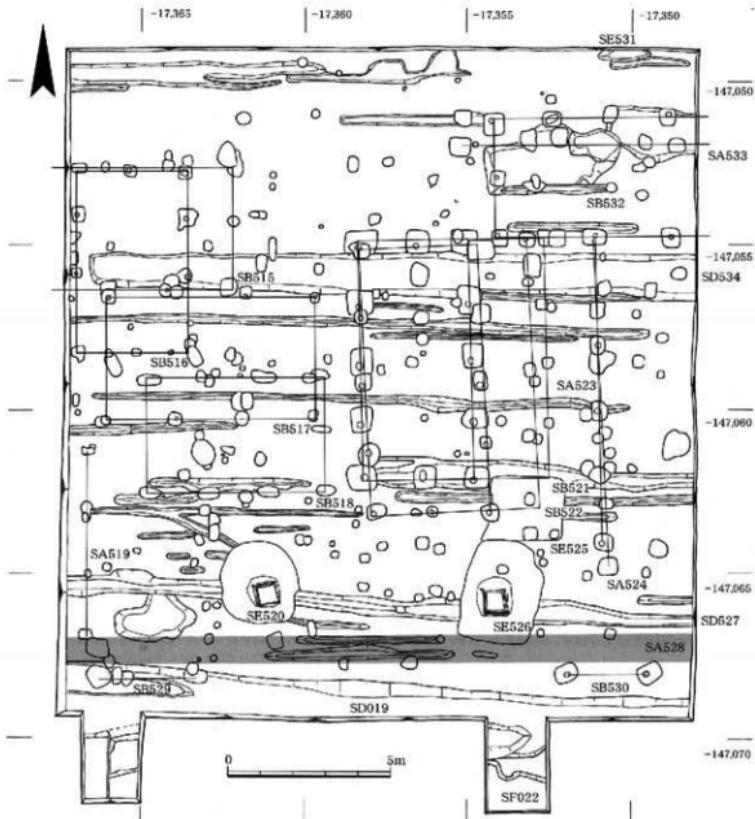
**SA524** SB522の東側2.1mで検出した東西5間の掘立柱列である。柱間寸法は、2.1、1.8、2.1、2.1、2.1mである。SB522の桁行と並行していることから、同時期の掘立柱構と考えられる。

**SE525** 発掘区の南東で検出した平面隅丸方形掘形の井戸である。掘形は、東西4.7m、南北

3.95m、深さ2.3mである。枠は、抜き取られ、枠材の一部と8世紀の土師器、須恵器が出土した。

**SE526** 発掘区の南東で検出した平面不定形掘形の井戸である。掘形は、東西2.35m、南北3.1m、深さ2.3mである。枠は、方形縦板組隅柱横桟留で、内法は、各辺とも0.7mである。枠内から8世紀末の土師器（杯・椀・皿・甕・羽釜・ミニチュア竈）、須恵器（杯・杯蓋・皿・壺・甕）、製塩土器、墨書き土器、鉄製ヤス、紡錘車、横櫛、斎串、桃の種、丸・平瓦が出土した。

**SA528** 発掘区の南辺沿いに想定される六坪の



第29次調査 遺構平面図 1/150

南辺築地壠である。築地本体は、残っていないものの築地構築時の添柱穴、又は足場穴と考えられる径0.2~0.3mの柱穴が1.2m幅で、間隔は不揃いであるが東西に並ぶ。

**SB529** 発掘区の南西隅、後述の八条々間南小路北側溝SD531に沿って検出した東西1間の柱列である。柱間寸法は、3.0mである。柱穴から土師器、須恵器、黒色土器が出土した。坪の南側に聞く門の可能性がある。

**SB530** 発掘区の南東隅、後述の八条々間南小路北側溝SD019に沿って検出した東西1間の柱列である。柱間寸法は、2.7mである。SB529と同様に坪の南側に聞く門の可能性がある。

**SF022・SD019** 発掘区の南辺で検出した八条々間南小路と東西に延びる北側溝である。溝は、長さ20m以上、幅2.1m、深さ0.24mである。埋土は、上層が茶褐色土、下層が褐色灰色砂質土である。溝心の国土座標値は、X=-149,069.00m、Y=-17,365.00mである。

**SE531** 発掘区の北辺東側で検出した平面不整形掘形の井戸の一部分である。掘形は、東西が1.6m、南北が発掘区外北へ広がるため、詳しいことは分からぬ。部材は抜き取られ、抜取穴から8世紀末から9世紀初頭の土師器、須恵器、黒色土器A類、丸・平瓦が出土した。

**SB532** 発掘区の北東で検出した桁行3間(5.4m)以上、梁間2間(3.6m)の東西棟建物である。柱間寸法は、北側柱列が1.8m等間、南側柱列が西から1.8、3.6、1.8mである。梁間は、1.8m等間である。柱穴から8世紀末から9世紀初にかけての土師器が出土した。重複関係からみてSB521・522より新しい。

**SA533** 発掘区の北東で検出した桁行3間(6.6m)以上の東西方向の掘立柱列である。柱間寸法は、東から2.1、2.1、2.4mである。柱穴から8世紀の土師器、須恵器が出土した。

#### B. 鎌倉時代の遺構

**SB518** 発掘区西半で検出した桁行3間(5.4m)、梁間1間(3.6m)の東西棟建物である。柱間寸法は、桁行1.8m等間、梁間3.6mである。全ての柱穴には、柱抜取跡が見られる。柱穴から8

世紀の土師器、須恵器のほか、13世紀の瓦器が出土した。

**SD527** 発掘区の南側で検出した東西方向に延びる溝である。長さ20m以上、幅0.75m、深さ0.14mである。8世紀末から9世紀初めの土師器、須恵器のほか、13世紀の瓦器皿が出土した。重複関係からみてSE520・526より新しい。

**SD534** 発掘区の北寄りで検出した東西方向の溝である。長さ18m、幅1.4m、深さ0.15mである。埋土は、茶褐色土で、8世紀の土師器、須恵器、13世紀の瓦器碗が出土した。重複関係からみてSB521・522より新しい。  
(秋山成人)

#### III. 出土遺物

上器、瓦、木製品、金属製品があり、遺物整理箱にして、土器が13箱、瓦が1箱、木製品が2箱、金属製品が3点ある。このうち井戸SE526からは、8世紀後半から9世紀初めの土師器、須恵器、七馬、木製品、金属製品がまとめて出土したのでこの一部について報告する。

##### A. 土器・土製品

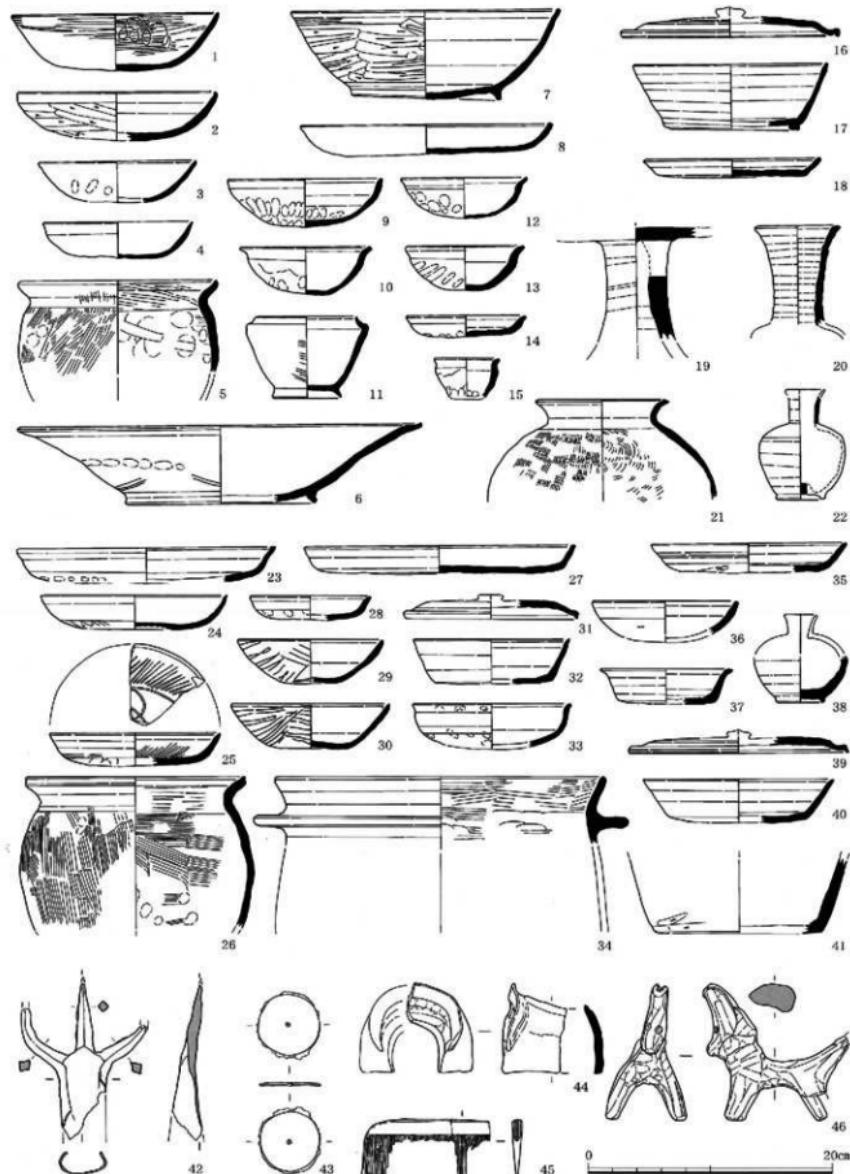
掘形・枠内・枠の抜取穴から遺物整理箱で5箱分出土した。

a. 摳形出土土器 8世紀後半から末にかけてのものと考えられる土師器杯C、椀A、須恵器杯A・B・E、杯蓋・鉢、壺Mがある。

土師器 杯C(35)及び椀A(36)は、口縁部内外面ともにヨコナデ、底部外面は、粗いケズリ調整。35は、裏母が若干混じるが灰白色系の精選された胎土である。36は、橙褐色系の胎土で白色砂粒が混じる。

須恵器 杯A(40)・杯E(37)は、底部ヘラキリ、口縁部内外面は、ロクロナデ調整。40の底部内面は、磨耗により調整が失われている。37は口縁部内面には漆、40は内外面全体に煤が付着している。杯蓋(39)は、頂部をヘラキリした後、内外面全体をロクロナデ調整、頂部内面には墨書きがあるが判読できない。壺M(38)の体部下半は、ロクロケズリ。鉢(41)は、体部外面下半を板状の工具でヨコナデした後、ケズリ調整。

b. 枠内出土土器 8世紀末と考えられる土師器杯A・C、皿A・C、椀A・C、壺、羽釜が、須恵器



井戸SE526出土遺物図 1/4

器杯A・B、皿A、杯蓋、甕がある。

**土師器** 杯Cには、底部が外側をケズり調整するものの(24)と調整がなく指頭圧痕が残るもの(25)とがある。25の内面に螺旋暗紋、一段の斜放射暗紋がある。24の底部外側から口縁部外側には、二次的に火を受けた痕跡が残る。皿A(23)は、口径21.2cmの大型の皿。口縁部内外面と底部内面はヨコナデ、底部外側は調整なし。皿C(28)の口縁部内面には、灯明芯の焦付きと考えられる痕跡が残る。椀A(29・30)と椀C(33)は、口縁部外側をヨコナデ調整。29・30は、口縁部外側に粗いミガキが施されている。29の底部内面には煤が付着。甕(26)は、体部内外面にハケメが残る。外側及び口縁部内面にかけて煤が付着。羽釜(34)は、口縁部内面に横方向のハケメが残る。内外面には、煤が付着。形態や胎土からみて河内産の製品であろう。

**須恵器** 杯A(32)は、底部外側はヘラキリ、口縁部内外面はロクロナデ調整。外面全体に煤が、内面には墨も付着している。杯蓋(31)の頂部外側は、ヘラキリ後ヨコナデ。皿A(27)の底部外側は、器面が磨耗して滑らかな状態になっている。墨書きも見られるが判読できない。

**c. 抜取穴出土土器** 8世紀末と考えられる土師器杯A・B、皿A・C、椀A・C、盤B、壺B・C・E、甕、黒色土器A類楢、須恵器杯B、杯蓋、皿C、高杯、壺G・M、甕がある。

**土師器** 杯A(2)は、平鉢に近い形態である。底部外側から口縁部直下までケズり調整。赤褐色系の胎土で、雲母や黒色砂粒を含む。杯B(7)は、底部外側から口縁部直下までケズり、粗いミガキを施す。底部内面には煤が付着。皿A(8)は、器表面が剥離しており、調整は不明。皿C(14)は完存。椀A(3)は、器表面全体が剥離しているため、調整は不明だが、体部外側には、指頭圧痕が残る。椀C(9)の胎土は粗く、長石、石英、雲母、黒色砂粒を含む。4は形態的な特徴と法量からみて椀と考えられる。体部外側の一部にミガキが残る。15は壺Bのミニチュアで、口縁部内外面はヨコナデ調整。体部内外面は指頭圧痕が残る。壺C(10・12・13)は、壺Bを小型にした器であ

る。口縁端部はヨコナデ、体部外側には、指頭圧痕が明瞭に残る。3点ともほぼ完存。壺E(11)は、体部外側をミガキ調整で仕上げる。盤B(6)は、体部外側下半にミガキが僅かに残る。甕(5)の体部内面には、当て具の痕跡がある。黒色土器A類楢(1)は、口縁部内外面を横方向のミガキで調整した後、内面に渦巻きの暗紋を施す。

**須恵器** 杯B(17)は、底部外側ヘラキリ、その他はロクロナデ調整。杯蓋(16)は、頂部内面の一部が摩滅しており、ロクロナデ調整が消えている。皿C(18)の底部内面も摩滅により調整が消えている。高杯(19)、壺G(20)、壺M(22)は、ロクロナデ調整。甕(21)は、体部外側のタキメの上に自然釉が厚くかかる。

このほか、土製品には、ミニチュア甕(44)、土馬(46)がある。44は廻を丁寧に表現している。46は後の脚部と尾部を欠く。いずれも棒内からの出上である。  
(二好美穂)

#### B. 木製品・金属製品

木製品には、横櫛(45)がある。残存幅10.3cm、高さ4.7cm、厚さ0.8cmである。棒内出土。鉄製品には、ヤス先(42)、紡錘車(43)がある。ヤス先は、残存長12.9cm、先端は三つ叉に分かれ、その広がりは幅10.3cmである。中央の1本は、直線的に延び、先端は、鋭く尖る。外側2本は、外方へ延びたのち、中央と同方向に延びる。刃部の断面は、菱形をなし、茎部は袋状である。紡錘車は、径5cm、厚さ0.2cm、孔径0.3cm、重量12.524gである。全体が錆付いている。いずれも棒内出土。

#### IV. まとめ

以下に奈良・平安時代の造構の変遷について述べる。まず、八条々間南小路北側溝SD019、築地溝SA528、井戸SE525が造られ、発掘区の西側では、棟方向が四方位と合う桁行3間、梁間2間の規模の小さい建物SB515・516・517が、建替わりながら存在する。奈良時代後半には、SE520・526が造られ、発掘区の中央から東側にかけて、棟方向が北で西に振れる大型の建物SB521・522と掘立柱列SA523・524・533が存在する。奈良時代末には、SB529・530・532、SA519が存在する。  
(秋山成人)

### III 史跡大安寺旧境内の調査

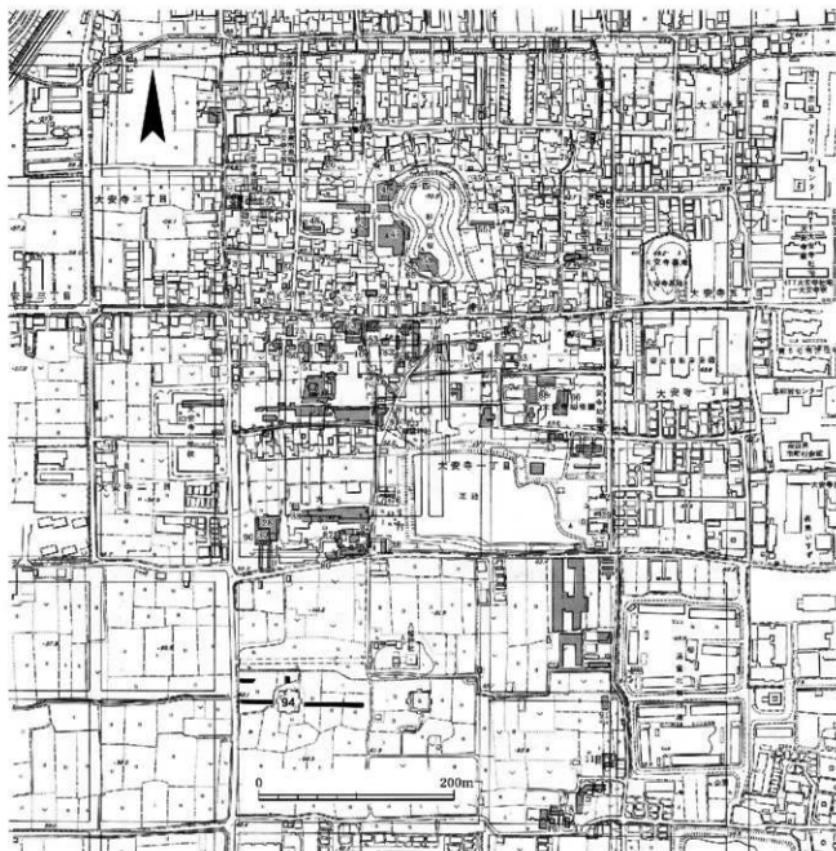
史跡大安寺旧境内では、平成13年度に3件の発掘調査を実施した。

第93次及び第95次の2件は、現状変更許可申請に関わる調査である。いずれも個人住宅改築に伴うもので、発掘調査の条件付きで、許可となったものである。遺構の存する面を確認し、それより上に建物基礎を設けて、遺構を保存した。

第94次は、「塔院地区」の保存整備事業に関する発掘調査である。保存整備事業に関する発掘調査は、平成11年度から「南大門地区」で実施してきたが、平成12年度に終了し、平成13年度からは「塔院地区」の調査を開始した。

平成13年度 史跡大安寺旧境内発掘調査一覧表

調査次数	申請者名	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
DA93	個人	個人住宅新築	大安寺4丁目1073-1	H13. 5.21 ~ 6.11	30m <sup>2</sup>	山前智敬
DA94	奈良市教育委員会教育長	史跡大安寺旧境内 保存整備事業	東九条町1320-2, 1337-1, 1336, ほか	H13.11. 2 ~ H14. 2. 6	355m <sup>2</sup>	松浦五輔美 中島和添 吉崎正裕
DA95	個人	個人住宅増築	大安寺5丁目1004-2	H13.12.11 ~ 12.18	11m <sup>2</sup>	山前智敬



史跡大安寺旧境内の調査 発掘区位置図 1/5,000

## 1. 史跡大安寺旧境内（西塔跡）の調査 第94次

### I. はじめに

今回の調査は、西塔跡を中心とした塔院地区の保存整備に係る調査において、今後の調査計画を立てるための試掘調査として実施したものである。そのため発掘区は西塔跡を中心とした東西南北ラインを基準とし、第1発掘区は塔跡の東に62m、第2発掘区は西に34m、第3発掘区は北に8m、それぞれ13m幅の細長い発掘区を設定した。また条坊造構確認のため、敷地の北西部に第4発掘区を同じく3m幅で東西に14m設けた。

なお、本報告で付した造構番号は、古墳時代以前の造構を2桁、奈良時代以降の造構を3桁の番号で表している。

### II. 層序

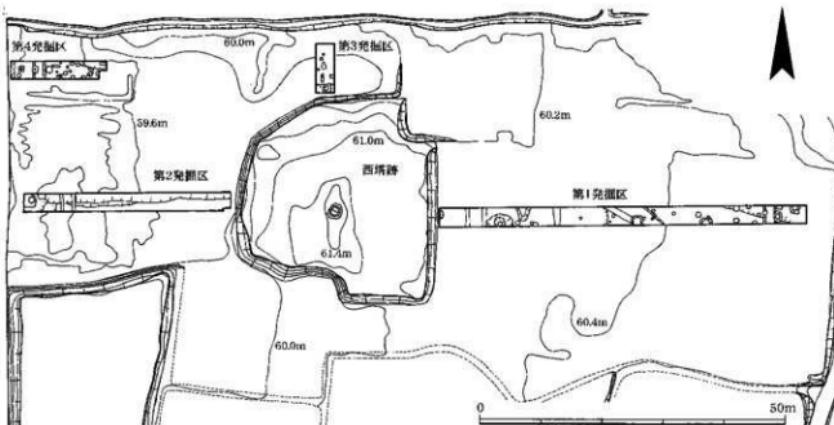
調査地の上層は、各発掘区で異なる。

第1発掘区は、基本的に耕土下に1枚の遺物包含層を挟んで礫混じりの黄色粘土の無遺物層（地山）となるが、西半では、造構検出面の下にさらに遺物包含層が0.4m堆積し、灰色砂の無遺物層（地山）となる。塔跡土壤層から東へ約4mまでは、耕土下から造構検出面までの間に各0.1m厚ほどの3枚の連続した整地土層が明瞭に堆積している。この

整地土層上面と耕土の間に約0.1mの瓦の集中堆積層があるが、発掘区西端でわずかに認められるのみで、土壇の中へ統いていくようである。無遺物層（地山）上面の標高は、東半で約60.0m、西半で約59.2mである。

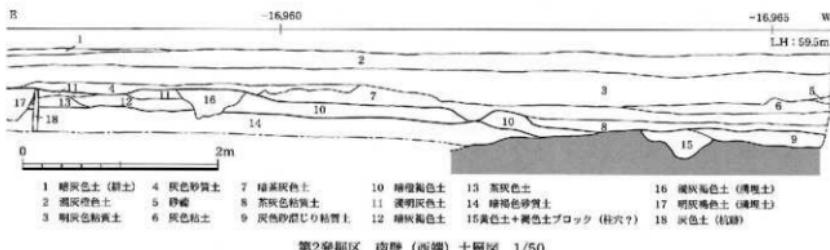
第2発掘区は、東半では耕土下に整地と思われる土層が各0.2~0.3mずつ大きく2枚堆積し、暗黄色砂混じり粘土の無遺物層（地山）に至るが、東半では暗黄色粘土の上に暗褐色砂質土が堆積しており、この上面が奈良時代の造構の存する面となる。この面は西に向かって下っているが、発掘区西端から6mは、特に急に下っており、広い溝状の落ちとなる。この溝状部分では、暗黄色粘土および暗褐色砂質土の直上に0.1~0.2mの硬くしまった暗褐色土の瓦の集中堆積層（上層10）がある。無遺物層（地山）上面の標高は、東端で約58.7m、西端で約58.3mであり、第1発掘区西端よりさらに1m低くなっている。

第3発掘区は、耕土下に約0.3mの砂質土が堆積し、黄色粘土の無遺物層（地山）となる。南壁際1mほどは塔跡土壇に向かって落ちているが、溝か土坑かは不明である。上面の標高は、約59.2m



発掘区位置図 1/800

### III 史跡大安寺旧境内の調査



である。

第4発掘区は、耕土下に黄灰色と暗灰色の粘土が0.2~0.3m堆積し、その下に0.1mほどの橙・灰褐色土の整地土層があり、黄色礫混じり粘土もしくは灰色砂の無遺物層（地山）となる。整地土層の上下に時期の異なる遺構の存する面がある。無遺物層（地山）上面の標高は東端で約58.8m、西端で58.4mであり、第2発掘区同様西側に下っている。

#### III. 検出遺構

検出遺構には、溝・土坑および柱穴と思われるものがある。発掘区が狭長で、全容が確認できるものは少ないため、主な遺構についてのみ述べる。

SK01 第1発掘区西半の最下層で検出した。直径約2.0mの平面円形で、深さ約0.7mの土坑。幅

鉢状を呈す。弥生時代末頃の土器が出上している。

SD101 第1発掘区東端近くで検出した、幅約2m、深さ約0.15mの南北溝である。東岸沿いに20cm角ほどの礫がまばらに並び、底面には小礫が敷かれた状態となっていた。しかし、残存状態は悪く、敷石の溝として判断するには、今回の発掘区内では困難である。溝心の座標は、X=-148,284.0m、Y=-16,843.2mである。

SD102 第2発掘区北壁沿いに東西に延びる、幅1.5m以上、深さ0.2m以上と考えられる溝である。この溝の位置は、条坊計画線に照らせば、左京七条四坊一・二坪坪境小路にあたる。大安寺造営前にこの場所に先行する条坊道路が走っていたとすると、SD102はその側溝の可能性も考えられる。塔院付近の調査から考えると、南側溝の可能

